

学術情報センター ニュース

第 18 号目次

- | | |
|--|--|
| • 電子計算機システムの更新について…… 2 | • 電子掲示板サービス (NACSIS-BBS)
利用者へお知らせ…… 29 |
| • 新システムの構成…… 3 | • 目録システム接続ニュース…… 29 |
| • 在日大使館科学アタッシュとの懇談会… 6 | • 学術情報ネットワーク (パケット交換網)
加入機関…… 30 |
| • 猪瀬 博所長 文化勲章を受章…… 7 | • NACSIS-IR データベース収納状況 …… 32 |
| 《研究開発》 | • NACSIS-CAT データベース構築状況 …… 33 |
| • 中国における日本研究とその情報源…… 8 | • NACSIS サービス Q & A (4) …… 34 |
| • 日本における国際書誌調整第10回公開
講演会…… 13 | 《教育・研修》 |
| • 韓国の大学図書館電算化国際セミナーに
参加して…… 14 | • 平成3年度学術情報センター・
シンポジウム (東京会場) 開催…… 39 |
| • 米国における電子図書館プロジェクト… 16 | • 平成3年度第1回総合目録データベース
実務研修を終えて…… 40 |
| • 英国図書館における ADONIS の評価 …… 18 | • 「東アジア文字データの国際交換に
関する実証研究公開講演会」の開催… 42 |
| • 『密結合型図書館ネットワークと電子
図書館』研究論集の刊行…… 20 | 《その他》 |
| 《NACSIS サービス案内》 | • 人事異動…… 43 |
| • ILL システムモニターの報告 …… 22 | • 学術情報センター日誌…… 43 |
| • インターネット・バックボーン (SINET)
の運用計画について…… 24 | • 海外渡航一覧…… 44 |
| • サービス利用の継続手続き…… 28 | |
| • 科学研究費による利用期限…… 28 | |

電子計算機システムの更新について

学術情報センター教授

はま だ たかし
濱 田 喬

学術情報センターでは、平成3年12月から平成4年1月初めにかけてシステムの更新を行い、新計算機システム HITAC M-880 / 420 および M-880 / 210 を導入した。

本センターでは、前身であった東京大学文献情報センター当時の昭和59年度にオンライン目録サービスを開始して以来、昭和62年4月の情報検索サービス、昭和63年4月の電子メールサービスと、その業務の拡大をはかってきており、平成4年4月には ILL サービスの開始も予定されている。この間、利用者数は順調に増加してきており、特に目録システムの利用の伸びは極めて大きく、昭和61年4月の学術情報センター発足時の登録端末数は約130であったのが、現在では1,600に達し、ほぼ2次曲線を描いて増加してきている。投入されるトランザクション数（処理件数）も当然ながら急増しており、現在では毎分700トランザクションになっている。

また一方では、情報検索サービスのためのデータベースの整備も進み、外部から導入しているデータベースの増大もさることながら、本センターが独自に作成している学術情報データベースの数も急速に増加している。

このようなサービス需要に対し、当初、文献情報センターでは HITAC M-280H 3台から成るシステムを導入してサービスを開始したが、利用者増に伴い、学術情報センターへ改組後の昭和62年1月には HITAC M-680H 3台のシステムに更新した。しかしこのシステムも2年しか持たず、平成元年1月には HITAC M-684 および M-682 からなるシステムに入替えた。新機種導入の度に性能は倍増しているが、ここ2,3年のサービス需要の急増には如何とも対処し難く、今回、まる3年目の機種更新となった。

新システムの HITAC M880 / 420 および M880 / 210 は、それぞれ4台および2台の命令プロセッサ（IP）を搭載した新しい計算機で、IP 単体当りの性能は旧680系に較べて倍近くになり、IP 総数は旧システムと同じ6であるが、総合性能はほぼ2倍になっている。IP 毎にデータベースプロセッサ（IDP）を内蔵しているのは旧システムと同じである。それぞれのシステムの主記憶容量はアーキテクチャ上の限界である2Gバイトであるが、新たに半導体拡張記憶装置を合せて8Gバイト搭載しており、今後予想される端末数の増加に対応している。さらに、磁気ディスク記憶装置の総容量は1,021Gバイトとなり、本センターもついに1テラバイト時代を迎えたことになる。本センターでは増強されたシステムを有効に活用し、より質の高いサービスを維持していく所存である。

終りに、年末年始にかけての業務の停止に際し、御協力いただいた関係各位に感謝申し上げる次第である。

新システムの構成

1. 基本的な考え方

新システム (HITAC M-880 / 420, M-880 / 210) への更新は、既存サービスである目録所在情報サービスと情報検索サービスの提供をより一層充実させること、および平成4年4月より開始が予定されている ILL サービスに伴うユーザ増加への対応を目的として行われたが、システムの構成における基本的な考え方は、次のとおりである。

(1) 接続端末数増加への対応

- ①中央処理装置能力の強化
- ②主記憶装置の増強と拡張記憶装置の導入
- ③外部記憶装置との入出力の高速化

(2) 業務運用への対応

- ①外部記憶装置の強化 (大容量・高速化)
- ②研究・業務支援環境の充実 (端末システムの LAN 対応など)

2. システム構成の概略

(1) 中央処理システム

中央処理システムは、4台の命令プロセッサおよび2GBの主記憶装置で構成された M-880 / 420 と、2台の命令プロセッサおよび2GBの主記憶装置で構成された M-880 / 210 とを疎結合したマルチ・プロセッサ・システムである。M-880 プロセッサは現時点で日立製作所の汎用コンピュータ (Mシリーズ) の最上位機種であり、この構成は大学研究機関の中では最大規模の汎用コンピュータシステムである。

さらに、M-880 / 420 には6GB、M-880 / 210 には2GBの拡張記憶装置が装備されており、大きな記憶領域を必要とする学術情報センターのアプリケーションを高速処理できるようにメモリ面の能力の向上をはかっている。

また、データのソート・マージや検索などのデータベース処理の高速化をはかるため、旧機種同様 IDP (内蔵型データベース・プロセッサ) を装備している。IDP は科学技術計算等の分野で利用されている「スーパーコンピュータ」の並列処理技術をデータベース処理に応用したものである。

(2) ファイル・システム

ファイル・システムは、情報検索サービス及び目録所在情報サービスのデータベースの実体を蓄積するため、高性能でかつ大容量が要求される。

その中心的な役割を担うのが総容量1,021GBの磁気ディスク装置群である。この磁気ディスク装置は、1台35GBと高密度記録の装置である。技術進歩により1台当たりの記録密度は前システムの装置に比べ2.3倍となり大容量でかつ省スペース化を実現している。またキャッシュ機構により高速なアクセスが可能である。

さらに、高速記憶装置としてアクセス頻度の高いデータベースのインデックスやシステム・プログラムのために総容量8GBの半導体記憶装置 (通称 IC ディスク) を導入している。これは磁気ディスクに比べて約70倍のアクセス速度を持ち、多様な性能向上策がとれるよう配慮している。

また、今回新たに大容量記憶装置として、カートリッジ型磁気テープが1,532巻収納可能なカートリッジ型磁気テープ・ライブラリー装置を導入し、データベースの大量データのバックアップ等に利用している。

次に、全文データベースの画像情報のように膨大なデータの蓄積のためにジュークボックス型の光ディスク・ライブラリー装置を設置している。

なお、これらのファイル・システムは転送速度 9MB / S の光チャネルで中央処理システムに接続し全体の性能バランスに配慮している。

(3) 通信制御システム

通信制御システムは、オンライン・データベース・センターの玄関口という役割を持っている。本システムは、本センターが構築し運用している学術情報ネットワーク・パケット交換網を中心に、NTTのパケット交換網（DDX）や公衆電話網を收容するとともに、旧システムではサポートしていなかった ISDN や本センターが新たに構築を開始した大学等の LAN からの利用を可能とするインターネット・バックボーンなどの、新たな通信網の收容も可能としている。利用者は従来のモデムを使った電話網経由の無手順方式のアクセスやパケット交換網を利用した N-1 方式、VTSS 方式および、TCP / IP 方式などさまざまなアクセス方式を利用できるようになっている。

また、旧システム同様パケット交換網とは、高速の 48Kbps 回線で接続し、電話網とは利用者側端末に合わせて 300 / 1,200 / 2,400 / 9,600bps 回線を用意している。なお、ISDN およびインターネット・バックボーンからの利用は、現在計画中である。以上の他、全文データベースにおける図形やグラフなどの画像情報をファクシミリで入手可能とするため FAX コントローラを設置している。

(4) 入出力システム

データベースの構築・更新・再編成などセンター内作業を効率的に進めるため高性能の入出力システムを設置している。磁気テープ装置は、従来からのオープンリール型やカートリッジ型の装置を導入しており、大量のデータの入出力にその威力を発揮している。印刷装置としては、15,600行／分の連続紙型高速レーザプリンタや135ページ／分のカット紙型高速レーザプリンタを設置している。

(5) ワークステーション

目録端末は、2020 ワークステーションをベースにして開発された従来機を利用しており、本センターでは講習会等に利用されているが、講習機能の向上のため、講師用端末と受講者用端末間の相互通信を可能とするバス型 CAI システムを新たに導入した。

またデータベースの維持作業・プログラム開発などの業務支援用としてラップトップ型ワークステーションである 3010 を導入し、事務室内での省スペース化を図ると共に、ウィンドウ機能等を備えたデスクトップ型ワークステーションである 3020、そして研究開発用として RISC マシンである 3050 を導入した。また FDDI により 100Mbps の基幹 LAN を新たに構築した。基幹 LAN からは 10Mbps の支線ネットワーク（10 BASE 5 及び 10 BASE T）を敷設して各ワークステーションや中央処理システムが接続されている。

（システム業務係）

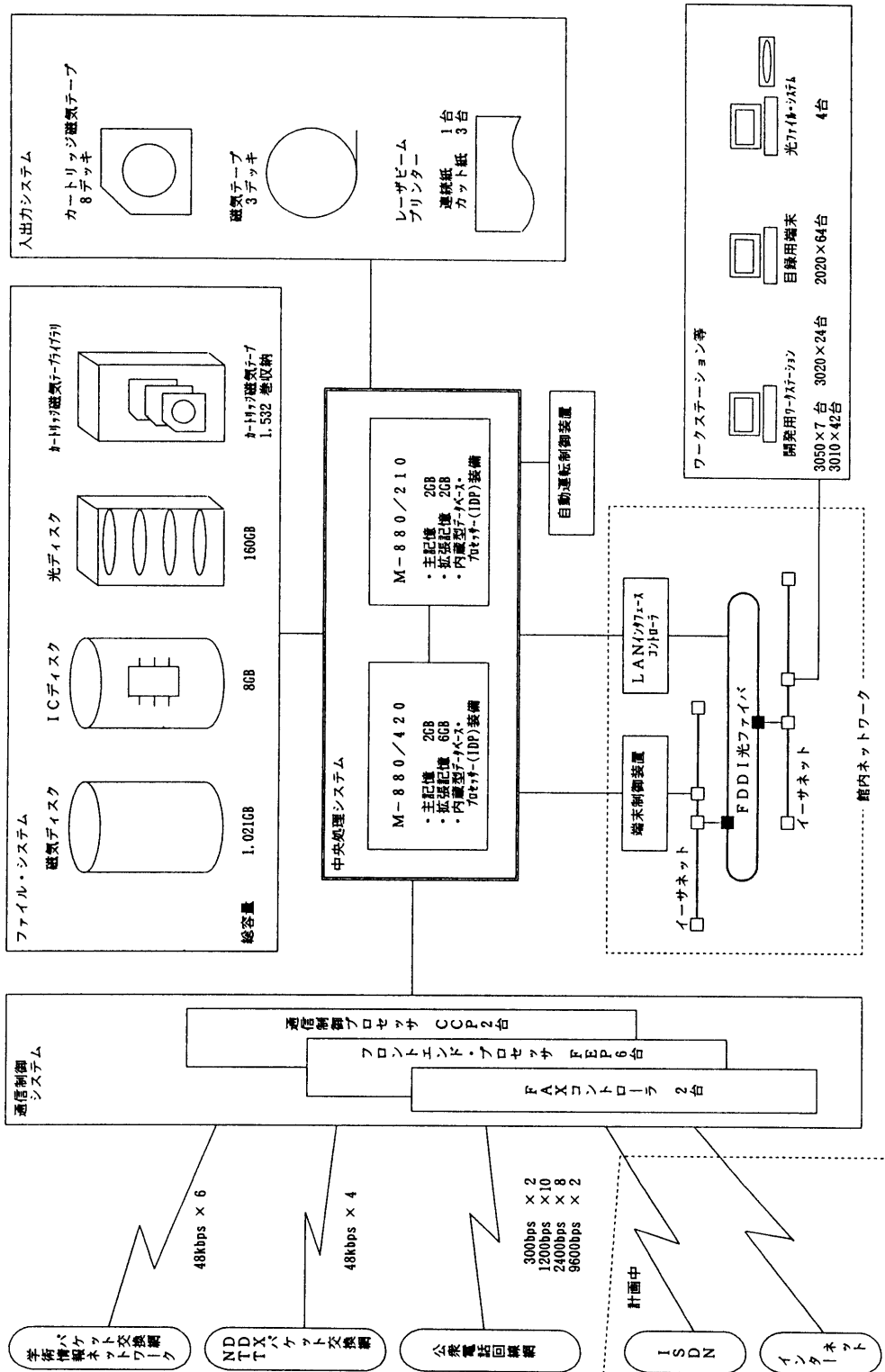


図1 学術情報センター システム構成図 HITAC M-880/420, M-880/210

在日大使館科学アタッシェとの懇談会

平成3年12月9日、在日大使館の科学アタッシェをお招きして懇談した。出席者は国名のA-Z順に次に示す16カ国、19名である。

Australia	Mr. D.J. Corcoran (Counsellor)
Belgium	Dr. J.-B. Aderca (Attache)
Canada	Mr. B. Carl Kuhnke(Counsellor)
Denmark	Mr. Bent Lindblad (Counsellor)
Finland	Mr. Ahti Niku (Assistant to counsellor)
France	Mr. Serge Plattard (Counsellor)
France	Mr. J.-F. Goubalt de Brugiere (Attache)
Germany	Mr. Otto Schneider (Second Secretary)
Hungary	Mr. Lazlo Gyorgy (Second Secretary)
Hungary	Mr. Sandor Botka (Vice President of National Committee for Technological Development)
Israel	Mr. Tuvia Zisner (Counsellor)
Netherland	Mr. P.J. Schalkwijk (Assistant Attache)
Norway	Mr. Masato Kubota (Assistant Attache)
Switzerland	Mr. J.M. Rayroux (Counsellor)
Thailand	Miss Malinee Puatham (Second Secretary)
U.K.	Dr. Richard Hinder (Counsellor)
U.K.	Dr. Robin Sowden (Science Officer)
U.S.A.	Mr. Michael V. MacCabe (First Secretary)
U.S.S.R.	Mr. Vladimir Soldaotov(Attache)

所長挨拶の後、センターの事業概要を山田研究開発部長から説明して質疑応答を行った。その後会場を移して、講習会室でセンター紹介のビデオと、目録所在情報サービス (NACSIS-CAT) と、情報検索サービス (NACSIS-IR) を、拡大画面によるデモンストレーションで見て貰った。

センターの紹介にあたっては、Science (科学) という用語に注意した。出席者の言う科学は自然科学 (+技術) のことであるが、一方学術情報センターもその英文名称には science の語を用いている。しかし NACSIS の言う science は、Arts and Humanities, Social Sciences を含む。この違いは大切であり、かつ誤解され易いので強調した。また、国立国会図書館との関係などにも言及した。

出席者の学術情報センターに対する事前の理解度は国によって差があるようだが、配布した要覧等を短時間で熱心に調べ、たちまち鋭い質問が相次いだ。質問は、学術情報センターのシステムに関わるもの、サービスに関するもの、制度的基盤に関わるものの3種類



であった。学術情報センターのサービス対象の範囲を、こうした在日大使館科学アタッシュェにまで広げて貰いたいなど、具体的なものが多かった。

もとより学術情報センターとしては、国際対応は重要な課題であり、可能な限りの努力をこれまでしてきた。その対象は必ずしも海

の向こうではなく、在日の外国機関こそ最重要であると考えてきた。これまで、アメリカン・センター図書館総合目録の運用、京都のスタンフォード大学日本センターへのサービス提供など一国対応であったものを、昨年暮れに在日情報サービス機関との懇談会を開催してから、multilateralな対応を合わせ図ってきた。今回の在日大使館科学アタッシュェとの懇談会はその延長上にある。

今回は、“公式”には英語使用であったが、昼食会はNACSISを会場にした国際会議の観があり、そこでは日本語も大いに飛び交った。日本の科学技術情報の収集に専従している科学アタッシュェとの交流の重要性を改めて再認識したことであった。

猪瀬 博所長 文化勲章を受章

平成3年度の文化勲章受章者に、猪瀬 博学術情報センター所長が選ばれ「文化の日」の11月3日に皇居・宮殿の正殿「松の間」で伝達式が行なわれました。

先生は、電子情報流通システム分野における数々の卓越した研究業績をあげられ、また学術情報システムの構築などを通じ学術の振興に貢献してこられました。

先生の御業績の中で、デジタル電話交換に不可欠な技術である「タイムスロット入替方式」は、電気通信工学上、今世紀を代表する発明の1つとして世界的な評価を受けておられ、今日のISDNの実用化につながる基礎技術となっております。また、各大学の異機種コンピュータを相互に接続するコンピュータネットワーク方式(N-1方式)は今日広く利用されており、当学術情報センターの事業にも活用されています。これらの他にも、広域道路網の信号制御方式を確立したこと等、多くの御業績をあげられております。

文化の日の当日、午前10時半から始まった伝達式では、天皇陛下の前で、海部首相から勲章と勲記を受けられたあと、陛下から「永年にわたり皆さんが学問、芸術の道で大きな成果を上げ、誠に喜ばしく思います。くれぐれも体を大切にしてください。今後ともそれぞれの道の発展のために努められるようお願いをいただきました。引き続き東庭で記念撮影が行われた後、記者会見で、先生は、「工学という地味な学問が認められたのがうれしい」と喜びを語られました。

中国における日本研究とその情報源

学術情報センター教授

いの うえ ひとし
井 上 如

平成3年9月7日から21日まで2週間中国に滞在し、2つの国家規模の図書館、4つの大学の日本研究機関、社会科学研究院系統の2つの日本研究機関等、合計9つの機関を訪れた。目的は、それぞれの機関における日本研究と、研究者の日本に関する情報収集状況、日本語コレクションの構築状況、総合目録の編集状況の基礎調査で、本年1月以来行ってきた欧米での調査の延長にある。欧米調査については学術情報センターニュースの第16号に、「欧米の日本語コレクションと日本情報への対応」と題して簡単な報告を掲載し、また、学術情報センター紀要第4号の詳細な報告が掲載される予定である。今回の中国調査については、先に口頭での報告（10月2日開催の、学術情報センター国際共同研究東アジア文字データベースの国際交換に関する実証研究第10回公開講演会）を行った。今回ここにその概要を示す。個々の訪問先での聞き取りを事例として踏まえた報告は、公開講演会の記録である『東アジア学術情報交流の高度化に向けて』の第3巻等に発表する予定である。

1 中国における日本研究

1) 研究機関・学会・学会連合

中国における日本研究機関が現在幾つあるのか、手元の収集資料からはつまびらかでない。武安隆、熊達雲共著による『中国人の日本研究史』（六興出版、1989. 359p.）は倭国（人）伝から1987年9月現在までの中国人による日本研究の歴史を概観したほとんど唯一の書物であるが、同書に引用された、中国社会科学院日本研究所の『中国的日本研究現状調査報告』（同研究所、1985. 謄写印刷）によれば、1984年の末で、全国に約60箇所、研究者数1,130人とあり、1988年末現在での日本研究に関する学術雑誌が33種類刊行されている。

これらの数値は、1984年に、“中国における日本研究機関とその研究概況及び中国の日本研究者とその研究分野の概要を明らかにするため”，日本の国際交流基金と中国社会科学院日本研究所が協力して実施した調査に基づき、中国社会科学院日本研究所がとりまとめた報告書（日本訳は昭和62年5月、国際交流基金刊行、318p.）の数値と一致するので、上記武安隆、熊達雲共著の著書に引用された謄写印刷物は、この同じ調査報告書に基づくものと思われる。

国際交流基金刊行の同翻訳書によれば、これら60機関の内、全国レベルの総合的日本研究所は7機関（天津社会科学院日本研、遼寧大学日本研、中国社会科学院日本研、東北師範大学日本研、吉林大学日本研、吉林省社会科学院日本研、河北大学日本研）であり、残りは、日本経済、日本語、日本歴史といった特定主題を持った、所属や規

模の異なる日本研究室（組）であるとされる。このうち所属は、社会科学院系統、大学系統、中央と政府機関の系統の3区分に分けることが出来る。

日本研究者の集まりである学会は、全国規模のものと、地方的なものがあり、併せて10乃至12学会あるとされる。全国規模の中の主なものとしては、中国日本史学会、中華全国日本哲学会、中華全国日本経済学会、日本文学研究会、中国中日関係史研究会等が挙げられる。

最近の動きは、これら研究機関間の連絡・調整を行う学会連合である、中華日本学会が1990年2月20日に発足したことである。現在の加盟団体件数は47で、中国社会科学院との共同編集で、機関誌『中華日本学会通訊』を隔月刊で出しているのが中国における日本研究機関の動きを全国レベルで知るための貴重な情報源である。

2) 日本研究の特徴

よく言われるように、中国における日本研究の最大の特徴は、研究者の関心が日本の近・現代に集中するという点である。歴史学では明治維新と、1945年までの中日関係史、戦後史が中心であり、経済学では戦後の日本経済の復興と、最近の日本の経済力の国際的な影響である。これに対して、日本文化及び日本文化史の研究では、先史時代から現在までを広く対象とし、明治以前における中国文明の日本への影響をも視野にいれている。このことに関連して、日本文化の研究を研究対象に含む総合的研究機関で管理的な立場にある研究者は、現在の日本を理解するために、少なくとも近世の日本を理解することが不可欠であることを認めていた。

一方、日本経済と日本の政治が主な研究領域である研究所では、戦後日本の急激な成長に関心を絞っており、日本での交流先も大学だけでなく、民間の研究所やシンク・タンクを含むと言う違いがある。

更に興味深いのは、欧米先進国の日本研究が、エキゾチシズムに基づいた、どちらかという日本の古い文化に関心が片寄ることに対し、“西欧諸国は日本の近代化のモデルになった国々であって、日本の近代化から学ぶものがないから、古い文化を研究するのだ”という発言が今回の調査中聴かれたことである。明治までは、中国が日本に影響を与えた、明治以後は日本が中国に影響を与えた、だから明治以後を研究するのだ、という態度がはっきりしている。このことは、甲午（日清）戦争以後の中日関係を詳細に見た場合、日本の中国へのインパクトが大きいときほど、中国からの留学生の数や、中国での日本に関する文献の刊行量が急激に増えることから裏付けられる。

2 日本研究と情報源

1) 日本語文献の特異性

外国を研究しようとするれば、当該国の言語で書かれた文献を重視するのは当然で、特に日本を研究対象とした場合のように、日本語という単一の言語が、話し言葉としても書き言葉としても定着している場合はなおさらである。しかし、中国人が日本を

研究する場合は、そうした一般に通用する条件以外の特殊な事情が存在する。

第一に、日本は韓国と共に漢字文化圏に属していて、日本の書物が漢字仮名混じりで記述されているため、中国人にとって日本の書物は他の外国の書物よりも、理解し易い。

第二に、中国の日本研究の関心が、前述のように現代日本に集中するため、日本で日々新たに出版される日本語の書物への関心が特に高いということがある。このことは、日本語の書物が高価で、中国における研究資料としての蓄積が必ずしも十分でないこととも関連がある。中国国内に既に存在する文献よりも、日本での新刊書に興味に向くのである。

第三に、これは第一のこととも関係があるが、中国の日本研究では、日本語文献からの翻訳が、研究業績としてであれ、出版事業としてであれ、歓迎されると言うことがある。

第四に、日本に留学した中国人学生が中国へ持ち帰った、日本の近代語（欧米の近代を日本に移し植えるために、明治初期の日本人が洋書からの翻訳の際に、一部の漢語に対して負わせた、近代の概念を表わす語彙、例えば〈社会〉〈階級〉〈経済〉など大量に存在する）が中国語になって、類似の文脈で用いられていることがある。

第五に、日本語は、外来語を片仮名表記するために、本来の日本語から外来語の語彙だけを識別することが容易で、一方中国では第一外国語が英語で、日本語に多い外来語も英語であることから、日本語の理解を更に容易にすることが挙げられる。

このため、日本を研究するための言語として、日本語以外の外国語、つまり英語／ドイツ語／フランス語を、やや軽視する傾向が見受けられる。ただし、これはモノグラフに関して言えることであって、逐次刊行物には当てはまらない。

2) 訪学

中国では、学術情報の収集は、それを発生させた学者のもとに直接赴いて行こうという伝統があるように理解した。中国国内はもとより、おびたしい数の学者が、あらゆる機会を捉えて来日し、各方面に互る日本の研究者に会い、その機会に多くの書籍を入手して中国に持ち帰るといふ発言からこれが分かる。このことは、書籍の流通において、寄贈交換という習慣が日中間でかなり普及していること、日中間の地理的な距離が近いことももとより関係があろう。

帰国後、中国滞在中にお目にかかった方々の内、すでに4人の方が今東京にいてと言って連絡をとって下さり、資料交換、情報交換をすることが出来た。「友好」といふ言葉の重みを改めて実感したことであった。

3 中国の図書館

1) 閲覧室

中国の図書館の特徴の一つは、閲覧室のスペース配分にあるようにみた。大規模な

図書館にあっても、閲覧スペースを大閲覧室に集中するということをせず、主題、利用者層、文献の言語別区分、文献のタイプ等によって、中規模の閲覧室を数多く設ける方向であるようだ。それは、北京大学の図書館で31の閲覧室に対する座席数が2,400席、中国国家図書館が30以上の閲覧室に対して座席数約3,000ということを見ても了解される筈である。そして、各閲覧室は、ただ座席があるだけでなく工具書（欧米でいうところのレファレンス・ツール）を備え付けている。

一方、日本研究を支援するための日本語文献を中心としたコレクションは、北京の日本学研究センターを例外として、利用者は文献を外部に持ち出す場合が多く、閲覧スペースは少ない。

2) モノグラフに対する雑誌の優位性

大学図書館の外国語の収集資料を言語別にみると、英語／ドイツ語／フランス語文献（西文）、ロシア語文献（俄文）、日本語文献（日文）が主であるが、大学図書館の雑誌閲覧室を見ていて、日本語文献の収集は、モノグラフよりも雑誌に力が入っているのではないかと考えた。このことは、日本研究所の図書室のように、日本語資料に特化した所ではなおさらである。このことは、日本語文献が高価である一方で、大部分の学術雑誌は交換での収集が可能であることと関係が有ろう。同様に高価な西文の場合も、日本及び日本を含む東アジア関係をカバーする雑誌が書架上で目だつこともまたこのことを裏付けている。更に、日本に関する関心が、前述のように、特殊現代的であることとも関係が有ろう。

3) 寄贈図書とその扱い

訪れた先で、ほぼ例外なく寄贈による日本語のコレクションのあることが目だつ特徴である。中国国家図書館は、日本の主な出版社の出版物をとりまとめた日販の定期的な寄贈図書を「日本出版物文庫閲覧室」で公開しており、岩波書店は、創業者岩波茂雄氏（1881-1946）の遺言で、北京図書館始め、東北師範大学、北京大学、武漢大学、中山大学の図書館に、年度別の全ての出版物を寄贈しており、国際交流基金は、これは何も中国に限らないが、大学等に対する日本語文献の寄贈をし続けており、有澤廣巳先生や高崎達之助先生など、日中友好に貢献してきた学者や政治家の寄贈図書はあちこちにある。

これらの寄贈図書は、欧米の日本研究機関等と扱いが異なり、別置しており、中には、文庫名を付けたりしているところもある。

4 総合目録への可能性

1) 記述の標準化

所蔵文献を相互に利用するための総合目録を編集する動機は、自館にきた利用者の

情報ニーズがその図書館の蔵書では満たされず、他館の協力を仰ぐ程度がどのくらい有るかに左右される。他館の協力を仰ぐ程度は、図書よりも雑誌に多く、また高価なため分担収集の対象となる文献ほど多くなる。もう一つ、実際の協力には、相互の所蔵を確認するための記述（書誌と主題）の標準化が必須である。

中国では、「中国国家図書館図書目録法」、「中国国家図書館図書分類法」、「中国科学院図書館図書分類法」、「漢語主題詞表」の普及によって、中国図書（中文）についてはそうした条件はひとまず整っているといつてよい。西文図書についても、AACR2が普及しているように見受けられる。また、図書館のシステム化に際して、UNIMARC等の世界の統一的な目録記述法に準拠すべしという考えも行き互っている。

中国語の読み方表記の統一的な国家基準であるピン音は、地域による発音の違いによって、実際に配列されたカードを繰る際に少し混乱が起ることと、高齢者には役に立たない。そこでどの図書館でも画数順の配列が必須となっている。

2) 実例

記述の標準化の条件は整っているが、実際に編集されている総合目録は、西文、欧文が多い。これは先に挙げた他館の協力を仰ぐ度合いが、中文図書よりも西文図書の方が多ということである。これには西文図書が高価であることも関係している。

中国国家図書館は、『全国西文連続出版物連合目録1978-1984』（本文4冊＋索引2冊）を作成している。公共図書館も含め、586館が参加している。1990年までをカバーした補遺版は、編集は終わったが未刊である。モノグラフについてもかつては作成していたが、現在は中止している。

中国科学院文献情報センターは、傘下に140館もの図書館を抱える大組織であるが、その洋文の逐次刊行物の総合目録を編集、刊行している。13,000タイトルを収録し、1,000部印刷、配布する。洋文のモノグラフについては、北京市内の傘下の45館が参加したものを作っている。30,000タイトルを収録している。

日本の国際交流基金が中国国家教育委員会と協議して設立した日本学研究センターでは北京図書館（中国国家図書館）、人民大学図書館、北京大学図書館、北京外語大学図書館、それと自館の、北京市内にある併せて5館の総合目録を編集している。これは日本語文献の総合目録としては、解放後では初めてのものであろう。雑誌記事とモノグラフ（翻訳書も含む）をともに収録する。出版目録や索引から日本に関する書誌を作り、それを参加館に持参して所在を確かめた。近く創刊予定の『中国日本学年鑑1949-1990』の巻末に収録する方法で、定期的に発表したいとのことである。

それからこれは総合目録編集の計画そのものではないが、中華日本学会、中国社会科学院、河北大学日本研究所の3者が発起人となって「日本研究図書資料情報交流会」という、より本格的な協力機構の設立の呼びかけが行われ、去る9月、第1回の会合が開かれた。日本研究のための情報源の整備という観点から今後注目すべき動きである。

日本における国際書誌調整第10回公開講演会



標記の第10回公開講演会を1991年10月2日（水）午後約50名の参加を得て、学術情報センター別館会議室で開催したのでその概要を報告する。

研究代表者である山田尚勇研究開発部長が開会挨拶を述べたのに続いて、「情報資源の整備状況からみた中国研究と日本研究」と題して、センター井上教授が発表し、中国における日本研究機関と日本研究の特徴についての概要を述べ、総合目録の現在の状況及び可能性と日本語資料について中国の図書館が指向することなどを含む中国訪問調査の全般的な内容を報告した。

「韓国の国立大学図書館電算網計画の概要（Library Network Plan of Korea National Universities; an Introduction）」と題して、ソウル大学校図書館長兼国立大学図書館協議会会長である鮮于仲皓（Dr. SONU Jungho）教授が講演した。現在ソウル大学を中心とする33の国公立大学図書館で計画・推進している、大学図書館学術情報資料の共有体制の構築に関する基本方向および目標、それらを実現するための具体的な推進方案などについて全般的な状況を論じ、これから構築される図書館電算網事業に関する日本側（NACSIS）の協力を強く要請した。

ちなみにこれに先だて、ソウル大学図書館自動化システムの調査のため今年の4月と7月の2回にわたりセンターを訪問し、センターでの具体的な経験を交えた詳細な説明を受けられたことも添言する。また、ソウル大学校と東京大学との間は1990年8月17日「学術交流協定」を結んでいる。

さらに、「CJK-JRGと漢字コードの統合化」と題して、センター宮澤彰教授は東アジアで共通に使われる漢字について、その共通の文字レパートリの作成を検討する会議であるCJK-JRG（China Japan Korea - Joint Research Group）の日本代表の一人であり、漢字コードに関する国際会議のいままでの経緯と背景、国際的な主要論点となっているDIS10646の漢字部門の分離化案と統合化案についての説明と今後の見通しについて報告した。これらの研究は今後の東アジアでの学術情報流通に大きく影響するものであり、センターでは標記の国際共同研究を進めるなど積極的に行ってきた。

センター研究開発部内藤衛亮教授が平成4年1月29日開催予定である最終公開講演会についての案内と、参加者、発表者に謝意を表し、閉会の挨拶とした（文責：金容媛）。

韓国の大学図書館電算化国際セミナーに参加して

学術情報センター教授

みやざわ あきら
宮 澤 彰

10月17, 18の両日にわたり、ソウル大学で開かれた「大学図書館電算化国際セミナー」にゲストスピーカーの1人として参加する機会をえた。この模様について報告する。

韓国の大学図書館はこの数年で先導的な大学図書館が電算化を行っている段階である。たとえば、浦項工大、梨花女子大、延世大学などが先行し、ソウル国立大学は現在開発中である。(以上のうちソウル国立大学以外は私立)。その他全国約300の大学(短大を含む)図書館のほとんどは電算化に興味を持ちつつ模様をながめている状態といえよう。今回ソウル大学図書館が主催した国際セミナーに、全国から500名を越える大学図書館関係者の参加があったことは、全国的規模での電算化と図書館ネットワークとがいよいよ現実になくなってきたという雰囲気映したものではないかと思われ興味深かった。とはいえ、このセミナーは韓国の聴衆のためのものであり、もちろん韓国語で行われたために、筆者は内容を十分理解はできなかった。したがって、伝聞と想像との混ざった報告であることは最初にお断りしておく。

日程は、初日に外国からのゲストスピーカーの発表、2日目に国内の大学図書館での電算化状況の報告及び総合討議(質問の時間)であった。開催場所はソウル国立大学教授会館。ソウル大学は旧市内から漢江をわたった南、冠岳山の谷間ひとつを占める筑波大学ほどの広さの新キャンパスにある。教授会館はこの新キャンパスが昔ゴルフ場だった頃にクラブハウスとして使われていた建物とのことで、ちょっとしたピークの上にあり、芝生の庭を持った見晴らしの良いところであった。セミナーの会場は会館内の講堂で、それほど大きくない部屋に折り畳みの椅子を敷き詰め300人余りの座席をつくってある。登録が500人を越えたということで、残りの人数は玄関ホールを隔てた会議室の方にビデオモニターを据え、ビデオカメラでの中継を行うというほどであった。

初日の朝に500人余りが登録に集まる混雑は、「まるで図書館大会です」と知人がいっていた。(筆者は図書館大会がどの程度のものか知らないが)。玄関ホールと裏庭のところでは湯茶のサービス(ちなみに、インスタントコーヒー、人参茶、麦茶)があり、集まってきた人々が知人を見つけてがやがやと立ち話をしている。玄関ホールではUTLASを含め、いくつかの会社がPCを使ったシステムのデモンストレーションを行っていた。UTLASは韓国用目録システムKOREAN-CATSSの試行デモ。ほかは、PCを使ったスタンドアロンの目録作成システムや、CD-ROMのジュークボックスシステムなど。

開会は10:30で、主催者である図書館長鮮于(ソヌ)先生、ソウル大学の総長、国会図書館長から挨拶がありいったん休憩。

最初の発表はUCLAの図書館長グロリア・ワーナー女史。“Introduction to Orion, The UCLA Library's Online Information System”と題し、UCLAの図書館システムであるORION(ちなみにオリオンと発音する)について、60年代に遡るその開発の歴史、発

展の経過、そして、現在の機能についてまとめた。意識的に平易な英語を用い、分かりやすい発表であった。もちろん通訳（逐次）が付く。なお、ソウル大学図書館から UCLA 図書館に何人かのスタッフを教育のためにおくっているとのことであった。

2 番目は筆者の発表で、「総合目録と日本の大学図書館協力」と題し、学総目と NACSIS-CAT の歴史について述べ、図書館ネットワークの形成と総合目録作成に対する日本の大学図書館の協力について強調した。発表は日本語で行い、ソウル大学図書館の司書課長柳（ユ）氏が通訳をしてくださった。

3 番目は OCLC のアジア太平洋地域スペシャルコーディネーター朴武在（パク・ムジェ）氏で、OCLC の現況と活動と題し、スライドを使いながら OCLC の活動とサービスについて一般的な発表を行った。朴氏は在米韓国人で、発表は韓国語。スライドは OCLC で用意されているようで、「OCLC の 1 分間」と題して何冊の本が目録されているとか、何枚のカードがつくられているとかいった数字を一般の人にも分かりやすい形でプレゼンテーションしていた。

4 番目は UTLAS の古屋夏子女史とジャック・ケイン氏。古屋女史が UTLAS の歴史と現在のサービスの概要についてごく簡単に話した後、ジャック・ケイン氏が“International Exchange of Bibliographic Data”と題して話した。英語で発表、通訳付き。発表論文集には漢字のコーディングの話から始まって、ソフトウェア環境、MARC フォーマット、著者典拠データなどについての東アジアの状況の簡単なサーベイがあったが、夕方 6 時半までのハードスケジュールでもあり、漢字コードの話の終わったところで皆さんもおなかやすいているようだからと切りあげた。

終了後、レセプションということで、すでに暗くなった教授会館の庭にライトをつけてテーブルがでて、参加者がおでんなどを食べながらビールという立食パーティーがあった。昼間であれば景色もよく快適であったと思うが、残念なことに10月のソウルの夜はやや肌寒く、大方の人々は早々に切りあげた模様であった。

2 日目は延世大学図書館の金尚基（キム・ジャンギ）氏、梨花女子大学図書館の申鉉植（シン・ヒョンシク）氏、ソウル大学図書館の金成中（キム・ソンジュン）氏がそれぞれの図書館の電算化の状況について発表を行った。ソウル大学図書館は自館の電算化のみでなく、教育電算網計画の一環としての大学図書館電算網センターシステムとして機能していく計画を持っており、ソウル大学の金氏の発表も「電算化の現況と大学図書館電算網」ということで、全国電算網計画にふれた。

発表の終わった後、総合討議として発表者全員が壇上に並び、質問を受け付ける時間があつた。ソウル大学の大学図書館電算網計画に関する質問が中心を占めていた。韓国は「ホット」な国であるが、今回のセミナーを見ても電算化とネットワークがホットな話題であることは十分感じとれた。本格的な図書館ネットワーク構築の基盤はまだ弱いものの、その実現に向けて着実に歩んでいるように思われる。

なお、韓国の状況は学術情報センターの国際共同研究「東アジア文字データベースの国際交換に関する実証研究」公開講演会でも何度か発表されており、内容は「東アジア学術情報交流の高度化に向けて」と題してセンターから公刊されている。ソウル大学の計画については今年度公刊の同書に含まれる予定であり、興味をお持ちの方はそちらを参照されたい。

米国における電子図書館プロジェクト

あ だち じゆん
安 達 淳

次世代の学術情報サービスでは「電子図書館」が目標になっている。多くは CD-ROM を利用した電子出版を念頭においてこの言葉を使っているようである。紙に印刷して出版される雑誌の代わりに、CD-ROM を媒体に使おうという試みで、例えば欧州で既に商用化されている ADONIS がこれに該当する。

一方、CD-ROM をベースにしたスタンドアロン型ないしはオフライン型のシステムではなく、文書の配布をネットワークを介して行おうという考え方もある。すなわちオンライン文書配布システムを要素の一部として取り込もうとするアプローチである。

学術情報センターでも、基本的にはネットワークを介した原文書データベースを中核に、学術情報システム上での「電子図書館システム」を構築して行きたいと考えている。

米国では、このようなアプローチですでに二つのプロジェクトが始まっている。今般これらの機関を訪問調査する機会を得たので、その実情についてご紹介したい。

電子図書館に関するプロジェクトでもっとも著名なものは、カーネギーメロン大学 (CMU) の Project Mercury だ。CMU はペンシルバニア州ピッツバーグにある小ぢんまりとした私立大学で、特に計算機科学で著名である。次世代オペレーティングシステムとして有望視されている Mach (マーク) というソフトウェアシステムの開発プロジェクトも進んでいる。

CMU では従来は OCLC を使って図書館機械化を行ってきたが、第 2 期の図書館機械化プロジェクトとして 1988 年に開始したのがこれである。このシステムでは、電子的に蓄積した学術論文を学内のネットワークを介して、利用者の使うワークステーションの上に直接表示しようというものである。

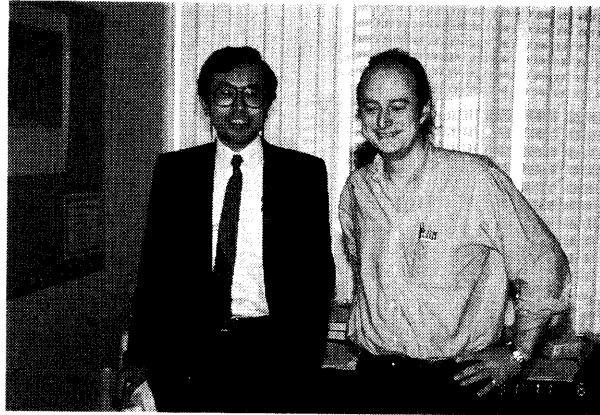


CMU 図書館での Mercury ワークステーション利用。12 月からの本格的稼働にむけて最後の調整が行なわれていた。

昨今の計算機のダウンサイジングの傾向を先取りして、まず IBM のメインフレームを追いだしてしまい、DEC 社の援助を受けその高性能ワークステーションを中心にシステムを構成している。現在予定しているのは、ACM, IEEE, AAAI などの雑誌の蓄積である。デジタルイメージとしての蓄積の他、電子出版の技法として欧米では既に主流となった SGML も使っていく方針である。もちろん

目録情報や10種ほどの2次情報データベースも同時にデータベースとして蓄積しオンラインサービスに供している。

現在、基本的な開発を終え、実際のサービスに入ろうとしているところである。LAN、ワークステーション、データベースサーバなど、これからの情報システムを構成すると予想される要素をきちんと把握したシステムで、期待が持てる。



カリフォルニア大学DLAのリンチ博士(右)と筆者。

コーネル大学のCOREプロジェクトは、もう一つの重要なプロジェクトである。これも電子図書館プロジェクトとして鋭意進められている。コーネル大学はもともとRLGのメンバーとして図書館ネットワークに加わって来たが、つい最近RLGとのオンライン接続はやめ、学内のローカルシステムに移行したところである。(目録は後でまとめてRLGに送りどける。)

COREはコーネル大学の農学や生命科学を中心とする図書館で主に進められている。これは、米国化学会、ベルコミュニケーションリサーチ(BELLCORE、ベル研究所の後裔)そしてコーネル大学の共同プロジェクトである。化学会がSGML形式の全文データベースを作成・供給し、BELLCOREはそれをワークステーション上で検索・表示するシステムを作成している。コーネルの図書館ではこのシステムの利用評価を担当している。化学式を含む図をウィンドウ内に表示したりするプロトタイプが稼働していた。

さて、以上のふたつのプロジェクトでは共通のデータベース管理ソフトウェアを使っているが、それを供給しているのがOCLCである。OCLCは数年前からEPICという一般ユーザ向けの情報検索サービスを開始したが、これを行うためにNEWTONというデータベースエンジンを開発した。さらに、このソフトウェアをUNIXベースのシステムでも動くように移植した。

CMUでもコーネル大学でも、データベースエンジンをOCLCから導入し、これを使って独自にデータベースと利用者インターフェースを開発してきた。また、OCLCではコーネルからの依頼によりMacの上で動く利用者インターフェースの開発も担当している。

最後に、カリフォルニア大学のDLA(Division of Library Automation)の論客のひとりであるクリフォード・リンチ博士に面会し、米国における電子図書館へ向かう動きについて話しあった。米国の大学の現在の一般的動向は、個々の大学で学内へのデータベースサービスを充実していき、その一環として電子図書館化を目指すという方向性が強いようである。その結果、わが国のような極集中型ではなく、多極分散型のサービスになりそうである。またその背景には拠点的学術機関の間をつなぐ広帯域ネットワークの存在を前提として、相互利用を考えているようであった。

今回の調査に当たっては、本センターの橋爪先生から全面的に協力を受け、大変効率的に調査が進んだ。この調査の詳細については改めて報告する予定である。

英国図書館における ADONIS の評価

はし づめ ひろ みち
橋 爪 宏 達

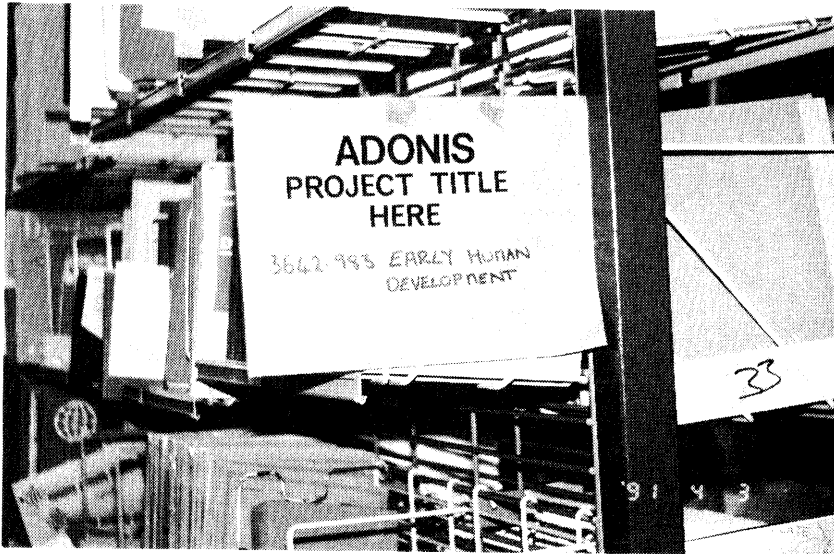
ADONIS は、1984年にはじまり1989年に実験フェーズを終了した「電子媒体による文献配布」のシステムである。ADONIS コンソーシアムを形成して、各参加者は別個の興味について実験した。中心になったのはオランダの大手出版社エルゼビアで、その意味で ADONIS は欧州の出版社の主導による電子出版プロジェクトとすることができる。その他、中小の出版社も参加している。2番目の立場の参加者はフランス科学技術ドキュメンテーションセンター (CDST) で、これは主に光ディスクの利用や衛星回線による文献配布の技術開発に興味を持っていた。3番目が英国図書館である。本年 (91年) 4月に英国図書館を訪問する機会を得、ADONIS プロジェクトの評価について取材したので報告する。

英国図書館は文献配布センター (DSC : Document Supply Centre) という機関を持っている。ここでは利用者の要求に応じて、本や資料のコピーを直接配布するサービスを行っている。いわばダイレクトサービスの図書館のようなものである。英国図書館ではこの DSC のサービス向上のために ADONIS に注目し、コンソーシアムの一員として ADONIS の実証試験を担当したのである。

ADONIS はそのごく初期からトラブルに見舞われた。CDST の担当していた光ディスクが失敗したのである。供給元の仏トムソン社は結局この光ディスク技術を完成すること



ADONIS システム。オンラインの CD-ROM による文献配布。
画面には雑誌のページイメージが出ている。CD-ROM は右側。



DSCの書棚にはところどころ「ここにADONISタイトルあり」の貼紙。
コピーはADONISから出せ、の意味。ただし実際の使用はこれからとのこと。

ができず、市場から撤退してしまっただ。初期ADONISのイメージであった「光ディスクによる中央センターでの文献蓄積、衛星回線とFAXによる利用者への配布」という形態は、壊れた。このため1985年前後でプロジェクトの運営は右往左往したようだ。

結局エルゼビアはCD-ROMで文献を利用者に配布し、そのアクセス履歴を記録したフロッピーを利用者から回収して、利用料金を請求するという変則的な形態を提案した。それが後期のADONISとなって、スタンドアロンのワークステーションシステムを完成し、実験フェーズを終了した。1991年現在、この方法で商業サービスが開始されたところである。

英国図書館はこの過程でADONISへの興味をおおた失ったようだ。今回取材してもADONISなんて過去のことはいいから、この先のことを聞いてくれ、といった反応だった。ここでは本年4月に、出版社と著作権上の協定を成立させ、将来文献を電子媒体で蓄積しても法的に問題が起きないようにした、とのことである。また主図書館の建物をロンドン・セントパンクロス駅に移動させるのに伴い、200kmほど離れている文献配布センターとの間にデジタルFAX回線を設立し、サービスに生かす、とのことであった。

英国図書館の電子化では、以前のADONISのような一発逆転的な試みより、むしろ着実な方法を探ろうとしているようである。しかしADONISの評価を行うことを忘れず、DSCでは引き続きこれの使用を試みている。また“Project Quartet”というレポートを作って、その中でADONISを失敗したプロジェクトとして、客観的にその原因を分析している。いつものことだが西欧の人々のこのような態度には敬服する。このレポートを入手できたことが今回の訪問の大きな成果であった。

ADONISの思想は米国に移り、かの地で各種の電子図書館プロジェクトとして現在進行している。それでわかるように、これは失敗プロジェクトではない。貴重な先駆的電子図書館プロジェクトとして、その冷静な評価が求められていると考えている。

『密結合型図書館ネットワークと電子図書館』 研究論集の刊行

学術情報センター教授

ね ぎし まさ みつ
根 岸 正 光

学術情報センターのオンライン目録システム NACSIS-CAT による目録所在情報サービスは、多くの大学図書館の参加を得、現下、総合目録データベースが急速な成長を続けていることは周知のとおりである。センターでは、このような状況を踏まえて、このシステムをより使いやすくすると同時に、より高次元での応用をも可能にするべく、研究開発を進めてきている。文部省科学研究費補助金による総合研究「学術情報ネットワークにおける密結合型図書館システムの諸機能の高度化とその応用」（昭和61～62年度）および「密結合型図書館ネットワークにおける統合業務システムの研究」（昭和63年度～平成元年度）もこうした研究の一環であった。そこでは、全国レベルの総合目録システムと個々の図書館固有のシステムとの有機的な連動関係を「密結合型」というキーワードで表わし、これを軸に据えた調査・研究・開発を行った。

これら研究の成果を踏まえて、密結合型のシステムと電子図書館をテーマとして、新たに論稿をとりまとめた図書が、「図書館システムの将来像——密結合型図書館ネットワークと電子図書館」¹⁾と題して、このほど刊行された。目録システムの関連では、先に「学術情報システムと大学図書館」²⁾が刊行されているが、これは、NACSIS-CAT 稼働当初の状況に対応してまとめられたものである。従って、今回の「図書館システムの将来像」は、その続編といった位置付けにあるともいえよう。以下、本書の内容構成について紹介する。

はじめに、猪瀬博「学術情報システムの展望」において全体的展望を得た後、第1部を「密結合型図書館ネットワーク——分散と集中」と題して、ここで、密結合型の図書館システムのありようを論じた。すなわち、書誌ユーティリティの一般論から説きおこして、大学図書館の機械化の動向、現行の目録システムのもつ課題、また LAN の普及という新たな展開における目録システムの構成方式、あるいはそうした技術を活かした実験システムなどを下記のように報告している。

- ・内藤衛亮「書誌ユーティリティと総合目録」
- ・上田修一「大学図書館における目録機械化の動向」
- ・松井幸子「目録システムの密結合化に向けて」
- ・大山敬三「密結合統合型図書館システムの構成法——LAN による分散処理方式の動向と将来性」
- ・山本毅雄・石塚英弘「密結合統合型図書館システムの可能性——オンライン書誌ユーティリティと各館の結合」
- ・高須淳宏「VTSS による密結合型利用者インターフェースの試作」

- ・山本毅雄「密結合型図書館システムにおける自動検索機能の開発・実験」
- ・宮澤彰「目録自動検索登録ソフトウェアの実用化状況」

第Ⅱ部では、「目録システムの展開と電子図書館」と題して、密結合化に並行して今後の展開が期待される電子図書館を中心テーマとし、将来的な図書館システムのあり方について考察した。すなわち、図書館システムの国際的な動向を鳥瞰・分析することから始めて、ハイパー・テキストやG4ファクス、SGML等々の新しい技術の動向に着目しつつ、目録、ILL、全文データベースなどについて、下記のような検討を加えている。

- ・松村多美子「海外動向にみる今後の図書館システム」
- ・石塚英弘「目録システムにおける Hypertext の可能性」
- ・影浦 峯・桂英史「電子図書館時代のリソース・シェアリング」
- ・安達淳「新技術による ILL システムの構想」
- ・宮澤彰・石川徹也「『電子図書館』における目録システム」
- ・根岸正光「全文データベースの課題と展望」

なお、NACSIS-CATの現況を数量的に確認するいみから、付論として、根岸正光「学術情報センター目録システムの関連諸統計とその分析」を収め、1991年3月末までの統計に基づき、NACSIS-CATの軌跡をたどり、ヒット率の動向などを明らかにした。

上掲松村論文には、今後の図書館のあり方について、「紙なし図書館」ではなく「壁なし図書館」へという方向が提示されている。こうした電子図書館の状況が進展するなかで、目録システム、ILLサービス、また全文データベースなどについてどのように考えてゆくべきか、大いに関心の持たれるところであろう。上記各論稿により、図書館システムの将来像について、多くの方々と関心を共有できることを願うものである。

《文 献》

- 1) 根岸正光, 猪瀬 博編「図書館システムの将来像——密結合型図書館ネットワークと電子図書館」, 紀伊國屋書店, 1991.12, 230p. ISBN4-314-10064-8.
- 2) 猪瀬 博, 井上 如, 上田修一, 根岸正光, 三輪真木子編著「学術情報システムと大学図書館」, 紀伊國屋書店, 1988.2, 209p. ISBN4-87573-122-1.



ILL システムモニターの報告

1. はじめに

平成4年4月からのILLシステムの運用開始に先立ち、関係機関のご協力を得てモニターを実施しました。レコード件数が毎日平均して増加して、試験的運用として過分のデータを採取することができました。今回のモニターにご尽力いただいた全ての皆様に対して謝意を表する次第です。

現在、レコードの分析や、各モニター館から提出して頂いた評価を検討しているところです、以下にモニターの結果を簡単に報告します。

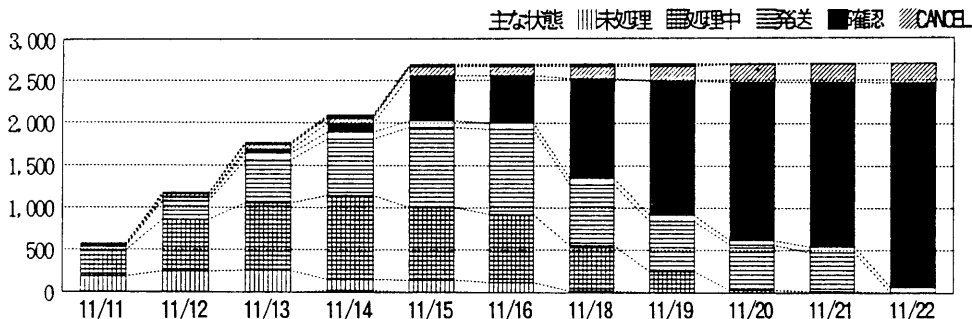
2. モニター概要

- ① 実施期間：平成3年11月11日（月）～平成3年11月22日（金）。ただし、新規に依頼ができるのは11日から15日の期間に限定した。これは、なるべくモニター期間中にILLレコードの状態が終了状態になるための措置である。
- ② 協力大学数（図書館室数）：66大学83図書館室。国公私の内訳では国立が53大学68館室、公立が1大学1館室、そして私立が12大学14館室である。
- ③ モニターの内容：複写業務に限定し、現物貸借の業務は実施しなかった。これも、モニター期間中にレコードの状態を終了状態にするためである。

3. モニター結果

- ① レコード件数：全体で2,693件のレコードが発生し、昨年度の実績から予想されていた2,000件より3割増の件数であった。
- ② 状態別件数の推移：ILLレコードの「状態」は処理状況によって次々に推移するが、モニター期間中の「状態」別の件数を表したのが下の図である。

モニター前期において毎日平均してレコードが増加していることや、モニター後期において依頼館に複写物が到着し「確認」の状態になったレコードが増加していく様子を窺い知ることができる。



- ③ 処理日数：モニター期間中は、ILL システムで依頼・受付を行うものを優先的に処理した図書館もあり、必ずしも通常の処理日数とは言えないが、また、あくまでもデータ上での算出であり実際の処理日とは異なる場合も含まれるが、参考までに次の3点の処理日数を算出してみた。

依頼から到着までの所要日数は、当日中に到着した30件を含めて2日後までに到着したものが1割、5日後までが5割、そして全体の9割のレコードが8日後までには到着した。

また、受付館での処理については、2割が受け付けた日に発送を行い、5割が翌日までに発送している。そして全体の9割のレコードが4日後までに発送している。

さらに、依頼館が依頼してから受付館で受け付けるまでの日数では、7割弱が当日中に受付館で受付処理を行っており、9割が翌日までに受付を行っている。

- ④ 転送レコード：ILL システムでは、最初の受付館が製本中等の理由により謝絶した場合でも、次の所蔵館に自動的に転送する機能を装備しているが、今回のモニターでも172件が転送され、しかもモニター期間中に確認状態になることができた。転送に伴う時間を節約するという自動転送の効果が確認された。
- ⑤ 和洋の別：今回のモニターで依頼された文献の和洋区分としては、和の資料が2割、洋の資料が8割であった。
- ⑥ 年代別：ILL レコードを分析することにより将来の分担収集・分担保存のための有効なデータを採取することも可能である。資料の出版年別の利用状況もそのような重要な指標のひとつである。今回のモニターでは、1991年の文献が1.5割を占め、最近5年の文献で4割、最近7年の文献で5割、最近10年の文献で6割、最近20年の文献で8割、そして最近30年の文献で全体の9割を占めていた。

4. 今後の日程

今回のモニターの結果を踏まえ、運用に備えてシステム的な最終調整を行います。広報・研修として次の活動を予定しています。いずれも各関係機関宛に開催案内の文書を送付してあります。

① 全国説明会の実施

- ・北海道地区：1月21日（火）、北海道大学学術交流会館
 - ・東北地区：1月24日（金）、東北大学附属図書館会議室
 - ・関東地区：1月27日（月）～29日（水）、筑波大学学校教育部G204号室
 - ・中部地区：1月28日（火）、名古屋大学豊田講堂
 - ・関西、中国・四国地区：1月30日（木）、大阪大学理学部D501講義室
 - ・九州地区：1月31日（金）、九州大学附属図書館視聴覚室
- 時間はいずれも13：00～16：30

- ② ILL システム講習会：4月1日から ILL システムの業務運用を開始する予定の大学等図書館の担当者を対象に、2月17日（月）から2月21日（金）の期間に、1回1日コースで5回実施します。学術情報センター講習室を会場とし、システムの運用及び端末操作に関する知識・技術の習得を目的としています。（専門・電子情報係）

インターネット・バックボーン (SINET) の運用計画について

1. はじめに

学術情報センターでは、先に、センターニュース17号でお知らせしました「学術情報ネットワーク インターネット・バックボーン（以下「SINET」(サイネット)）の試験運用を平成3年12月から開始しています。SINETは、研究・教育に必要な①種々の情報の形成、②流通ならびに③各大学等機関の計算機等の各種情報資源の共有を推進する「学術情報システム」を支える新しい基盤伝送路を提供することを目的とした情報通信網であり、平成4年4月から正式運用に移行し、大学等機関のネットワークの接続を受け入れていく予定です。

また、SINETは、試験運用期間を通して、他の研究ネットワークや、国際インターネットへの接続も行っていくことを予定しています。

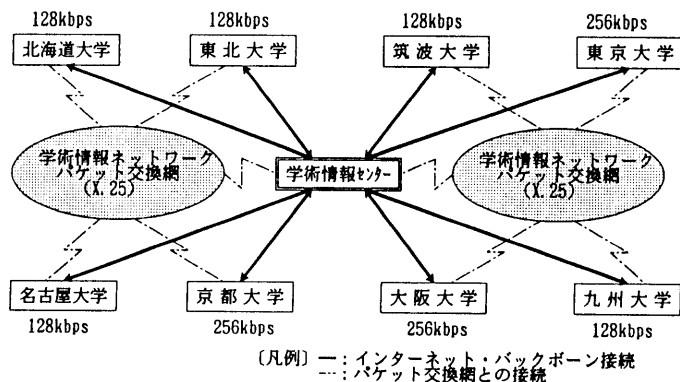
2. SINET の構成

(1) SINET の全体構成

SINETは、従来の学術情報ネットワークパケット交換網において、LAN間接続のトラフィックが集中するノード間を結ぶ専用の高速幹線網として位置づけられます。従って、SINETとパケット交換網が相補ってより高速なLAN間接続を実現できることとなります。

SINETは今年度の計画において、下図に示すように、学術情報センターとLAN間接続（プロトコル：TCP/IP）のトラフィックが集中する8つのノード（北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）に専用のルータを設置し、ルータを高速デジタル回線でスター状（注1）に接続し構成します。

また、各SINETのノードでは、パケット交換網と高速インターフェースで接続しパケット交換網に接続される各大学等機関のLANとの通信を可能とします。



注1) スター状の回線構成を採用した理由は、パケット交換網の幹線との整合性が良いこと及び所要経費が少なく済むためである。

(2) SINET ノードにおける大学等機関のネットワーク (LAN) との接続構成

SINET のノードには、通信経路制御のためのルータと、近隣大学等機関のネットワークを接続するための接続セグメントを設置します。

大学等機関のネットワークの接続形態として、次の2通りの方法があります。

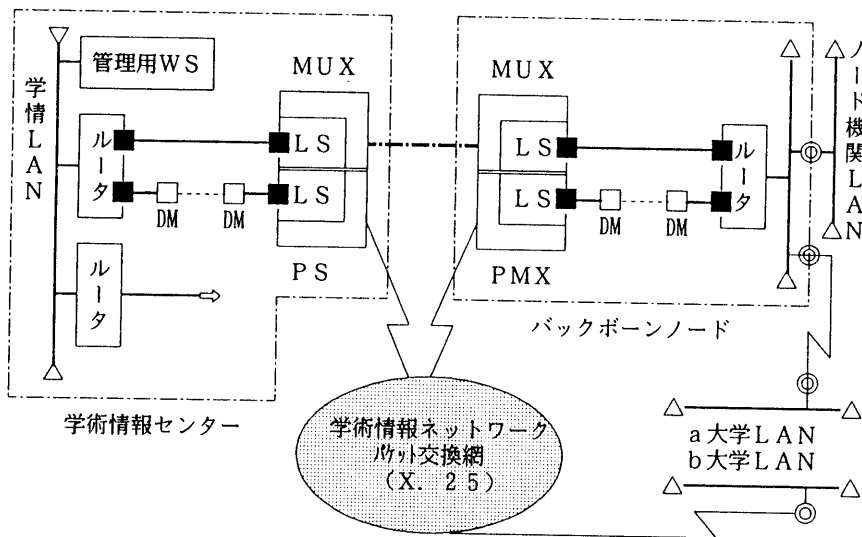
① 直接接続

SINET のノードに用意されている接続用セグメントのトランシーバに、加入機関が用意したルータを接続する形態です。(加入機関から高速通信回線を介して接続する場合は、加入機関側にもルータを必要とします。)

② パケット交換網 (X.25) 接続

パケット交換網ノード (全国28箇所) のパケット多重化装置を介して、加入機関に設置するルータを接続する形態です。この場合は、加入機関側にルータを1台用意します。

以下に接続概念図を示します。



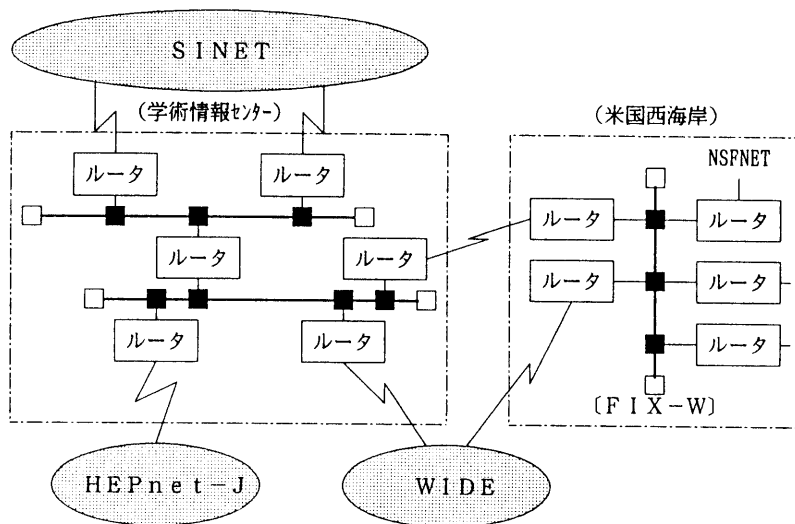
〔凡例〕

- | | |
|---------------------|-------------------|
| MUX : マルチメディア 多重化装置 | L S : ラインセット |
| P S : パケット交換機 | - - - : 高速デジタル回線 |
| PMX : パケット多重化装置 | ◎ : 加入機関側で設置するルータ |
| D M : デジタルモデム | |

(3) 外部ネットワークや国際インターネットとの接続構成

SINET は、「WIDE」や「HEPnet-J」等の国内の外部ネットワークや国際インターネットとの相互接続を試験運用期間中に実現する予定です。

(国際インターネットとの接続については「5. 国際間での IP リンク・サービスの試験運用の開始について」参照。)



凡例) FIX-W : Federal Interagency eXchange - West
 NSFNET : National Science Foundation NETwork

3. SINET の試験運用

平成3年12月から平成4年3月までの試験運用期間において、学術情報センターは、それ以降のSINETの正式運用に向けて、各種の実験等を行い、管理運用のための知識の蓄積、接続のための手続きの策定等を行っています。

主な項目を以下に示します。

- (1) 運用管理方式の確立
- (2) 運用管理のためのドキュメントの整備
- (3) 通信経路制御方式の最適化
- (4) 大学等機関のネットワークの加入のための事務手続き及び規則等の整備
- (5) 加入にかかる技術情報の広報等
- (6) 他の研究ネットワーク及び国際インターネットとの相互接続による運用方式の確立

4. SINET の機能

- (1) 加入ネットワーク（学内LAN等）相互のIPによる通信を可能とします。
- (2) 加入ネットワークと外部ネットワーク（国内の他のネットワーク、海外のネットワーク等）相互のIPによる通信を可能とします。
- (3) 大学等機関に対してセカンダリ・ドメイン・ネームサービスを提供します。

以上のことにより、利用者はSINETのIPリンク・サービスを利用し、計算機間で、仮想端末機能、ファイル転送機能等を利用できるようになります。なお、通信相手の計算機の利用資格は、それぞれの運用機関等から事前に得ておく必要があります。

5. 国際間でのIPリンク・サービスの試験運用の開始について

国内におけるSINETの整備と平行して、SINETと米国インターネットとの相互接続を行い、SINETへの加入ネットワークと海外の学術研究用インターネットとの間で、

国内と同様の IP リンク・サービスを提供します。このことにより、利用者は国際間での計算機の相互接続を行い、仮想端末機能やファイル転送機能等の利用が可能となります。

なお、この国際間での IP リンクのサービスは、このために必要な国際専用回線の敷設が完了する平成 4 年 2 月 17 日より試験運用を開始します。正式運用の開始に際しては、あらためて広報させていただきます。

この国際間 IP リンク・サービスの開始にともない、SINET と米国インターネット等を相互接続するために、米国西海岸の FIX-W との間に 192Kbps の国際専用回線を敷設します。また、接続先である FIX-W は、カリフォルニア州モフェットフィールドにある NASA / AMES にあり、NSFNET、NSI、ESnet 等、米国のインターネット・バックボーンが相互接続されている場所です。

ここは、日本をはじめ、アジア／大洋州のネットワークの受け口として位置づけられています。

注) FIX-W : Federal Interagency Exchange - West
 NSFNET : National Science Foundation Network
 NSI : NASA Science Internet
 ESnet : Energy Sciences Network

6. その他

(1) SINET の整備及び運用管理の体制について

SINET の整備及び運用管理については、学術情報センターの整備事業として行っているものでありますが、インターネットにかかる技術が新しいものであることや、ネットワーク構築及び運用管理に高度な知識が不可欠であることから、SINET の整備運用に当たって、以下の方々に御協力をいただき、学術情報センターに「インターネット研究会」および「インターネット・バックボーン運用連絡会」を設置しています。

- ① SINET のノード機関の研究者
- ② 学術情報ネットワーク利用における仮想ネットワーク等の代表者
- ③ インターネットにかかる学識経験者
- ④ SINET のノード機関の運用連絡担当者

(2) 加入の手続きについて

加入の手続きについては、平成 4 年 4 月以降に申請していただくことになります。

今後、前述の試験運用を通して、加入希望の機関から申請時に提出いただく情報及び、承認時等に学術情報センター側から設定する事項等を策定していくこととしています。また、これらの手続きについての広報は、平成 4 年のなるべく早い時期に行いたいと考えています。

この件に関するお問い合わせは、下記をお願いします。

事業部システム管理課ネットワーク係 TEL : 03-3942-6947, 8
 FAX : 03-3942-9398

サービス利用の継続手続き

平成4年度も引続き情報検索、電子メール及び国際電子メールサービスを利用する場合は、以下の方法により継続の申請を行ってください。継続の申請が承認された場合は、「利用承認書（継続）」を発行します。利用承認書の発行は2月下旬から送付を開始しますが、3月末までに届かない場合は、共同利用係まで問い合わせてください。

なお、支払科目を変更する場合、文部省科学研究費補助金を支払科目とする場合及び利用期限が3月末日でない場合は継続申請を行うことはできません。

また、平成3年度の新規及び追加の受付は平成4年2月22日まで、変更及び取消の受付は平成4年3月30日までとなります。

1. 学術情報センターへの直接申請による利用者の場合

2月上旬に、利用者宛へ継続利用申請書（あらかじめ今年度の情報が出力してある）を送付しますので、各項目を確認・押印のうえ、継続利用申請書を受付期間内（平成4年2月10日～平成4年3月19日）に返送してください。

なお、詳細は同封する記入要領及び留意事項をご覧ください。

また、継続申請時に利用サービスを変更することはできませんので変更する場合は、別途申請を行ってください。

2. 大型計算機センター経由による利用者の場合

利用者が所属する大型計算機センターへ継続申請してください。所定の手続きを行ったのち、所属センターのコマンド受付期間内に、第二センターとして学術情報センターの継続申請を、第二センター申請コマンド（継続）で行ってください。学術情報センターの受付期間は、平成4年2月10日～平成4年3月19日になります。受付期間を過ぎた場合は、継続申請を行うことができませんので、平成4年4月以降に新規で申請してください。

なお、第二センター申請コマンドの詳細は所属の大型計算機センターへ問い合わせてください。
(共同利用係)

科学研究費による利用期限

利用料金の支払科目が、文部省科学研究費補助金である場合は、当該サービスの利用期限は、平成4年2月15日（土）までになります。利用料金の請求（納入告知書）は、平成4年2月20日頃に送付する予定です。

なお、利用料金の支払いが文部省科学研究費補助金のみの方は、利用料金参照機能（CHARGE コマンド、学術情報センターニュースNo.17参照）が平成4年2月15日以降使用できません。利用料金の請求明細が必要な方は、データベース検索終了時に表示される利用料金の内訳をご利用ください。
(共同利用係)

電子掲示板サービス（NACSIS-BBS）利用者へお知らせ

（有効期限の過ぎたメッセージを削除します）

電子掲示板のメッセージには有効期限を設定できるようになっています。最長で999日です。従来は、有効期限を過ぎたメッセージを削除するこの機能を適用しませんでした。平成4年1月からは期限の過ぎたメッセージを自動的に削除することにいたします。有用なメッセージは有効期限が過ぎる前に、各利用者自身のファイルに保存する等の処置を取られることをおすすめいたします。

「有効日数」については、「電子メールシステム利用者マニュアル」（平成2年10月刊）P40を参照。

目録システム接続ニュース

前号以降、新たに目録所在情報サービスの参加機関となった図書館は、以下のとおりです。

（平成3年11月末現在）

No.	機 関 名	接 続 日	No.	機 関 名	接 続 日
168	北 里 大 学	3. 9.18	176	大 阪 市 立 大 学	3.10.28
169	北 九 州 大 学	3. 9.25	177	東 京 慈 恵 会 医 科 大 学	3.11. 1
170	広 島 修 道 大 学	3. 9.27	178	和 洋 女 子 大 学	3.11.11
171	九 州 産 業 大 学	3.10. 8	179	東 洋 大 学	3.11.13
172	近 畿 大 学	3.10.11	180	広 島 工 業 大 学	3.11.14
173	北 星 学 園 大 学	3.10.18	181	旭 川 大 学	3.11.15
174	東 京 農 業 大 学	3.10.22	182	愛 知 医 科 大 学	3.11.22
175	都 留 文 科 大 学	3.10.28			

この結果、参加機関数は、国立大学95、公立大学9、私立大学69、共同利用機関7、その他2、合計182となりました。
（共同利用係）

学術情報ネットワーク（パケット交換網）加入機関

1. 平成3年度加入機関

(平成3年11月末現在)

加入機関名称	加入機関名称
滋賀医科大学	名古屋商科大学
奈良教育大学	新潟薬科大学
高知大学	日本歯科大学
京都府立医科大学	金沢経済大学
石川県農業短期大学	京都造形芸術大学
北星学園大学	光華女子短期大学
札幌学院大学	大阪医科大学
東京慈恵会医科大学	梅花女子大学・短期大学
武蔵大学	姫路獨協大学
和洋女子大学	甲南大学
聖徳大学	福山大学
成蹊大学	広島修道大学
都留文科大学	広島工業大学
西東京科学大学	駒澤大学

注) 昭和62年度－平成2年度の加入機関については、センターニュース16号に掲載。

2. 加入の推移

〔各年度における設置形態別接続機関数〕

(平成3年11月末現在)

年 度	国立大学	公立大学	私立大学	共同利用等	放送大学	計
昭和61年度	4	0	0	1	0	5
昭和62年度	12	0	0	0	0	12
昭和63年度	19	0	4	6	0	29
平成元年度	23	4	28	6	0	61
平成2年度	13	2	18	1	1	35
平成3年度	3	2	23	0	0	28
合計	74	8	73	14	1	170

〔各年度における仮想ネットワーク別接続回線数〕

(平成3年11月末現在)

年 度	接続 回線 数	内 訳									
		N-1	図書 館	G4 FAX	SIMA IL	JAIN	HEP	UMIN	STEP	地震	その 他
昭和61	8	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0
昭和62	26	12	12	7	0	1	0	0	0	0	0
昭和63	53	30	23	3	0	7	4	1	4	0	0
平成元	118	45	43	16	5	6	11	8	1	0	1
平成2	96	32	26	7	2	14	7	8	5	4	4
平成3	51	24	21	0	0	8	2	0	3	2	3
合計	352	147	129	33	7	36	24	17	13	6	8

注) 内訳の名称は、学術情報ネットワークを利用した下記に示す仮想ネットワークの名称であり、仮称のものも含む。

N-1 : 大学間コンピュータネットワーク

図書館 : 図書館ネットワーク

SIMAIL : 大学間電子メールネットワーク

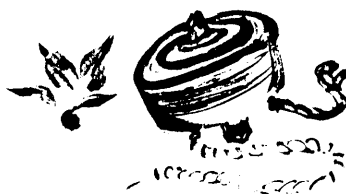
JAIN : LAN間接続実験ネットワーク

HEP : 高エネルギー物理学研究用ネットワーク

UMIN : 医療情報ネットワーク

STEP : 宇宙地球理学ネットワーク

地震 : 地震研究ネットワーク



NACSIS-IR データベース収納状況

平成3年11月2日現在

No	データベース名称	収納件数	収録期間
1	Life Sciences Collection	974,840	1982年1月～
2	MathSci	760,090	1973年1月～
3	COMPENDEX PLUS	2,264,159	1976年1月～
4	Harvard Business Review	2,511	1927年1月～
5	ISTP & B	1,605,122	1982年1月～
6	EMBASE	2,150,595	1984年4月～
7	SciSearch	3,207,696	1987年4月～
8	Social SciSearch	557,023	1987年4月～
9	A & H Search	511,171	1987年4月～
10	科学研究費補助金 研究成果データベース	57,146	昭和60年度～
11	学位論文索引データベース	49,570	昭和59年度～
12	学会発表データベース第一系 (電気・情報・制御関連)	52,818	昭和62年度～
13	学会発表データベース第二系 (化学関連)	13,092	昭和63年度～
14	学会発表データベース第三系 (建築・土木・造船関連)	5,149	平成2年度～
15	学会発表データベース第四系 (生物・農学関連)	729	平成2年度～
16	学会発表データベース第七系 (医学関連)	540	平成2年度～
17	学術論文データベース第一系(全文) (電子関連)	156 887	平成元年度～
18	学術論文データベース第二系 (化学関連)	4,191	昭和58年1月～
19	研究者ディレクトリ	130,109	昭和63年5月現在
20	現行法令データベース	3,563	平成3年3月末現在
21	海外研究プロジェクト データベース	45,698	
22	経済学文献索引データベース	12,243	平成2年度～
23	維新史料概要データベース	18,285	
24	JPMARC	1,046,040	1969年1月～
25	LCMARC(Books)	3,106,307	1968年1月～
26	LCMARC(Serials)	512,415	1973年1月～
27	目録所在情報データベース (和図書)	556,088 3,471,982	
28	目録所在情報データベース (洋図書)	1,126,090 2,385,612	
29	目録所在情報データベース (和雑誌)	65,088 1,434,459	
30	目録所在情報データベース (洋雑誌)	109,280 885,522	
31	アメリカン・センター図書館 総合目録データベース	6,320	
32	データベース・ディレクトリ	1,027	平成2年4月現在

(注) No 27～30のデータベースの上段は書誌件数、下段は所蔵件数。(システム業務係)

NACSIS-CAT データベース構築状況

平成3年10月31日現在

データベース名称		収納件数	備考(収録期間等)	
総合 目録 デー タベ ース	和 図 書	書 誌	556,697	
		所 蔵	3,479,387	
	洋 図 書	書 誌	714,799	
		書誌(遡及)	412,606	
		所 蔵	2,390,093	
	和 雑 誌	書 誌	71,888	
		所 蔵	1,483,491	
	洋 雑 誌	書 誌	110,442	
		所 蔵	894,384	
	著 者 名 典 拠		510,170	
	統 一 書 名 典 拠		1,304	
	和 雑 誌 変 遷 マ ッ プ		8,176	
洋 雑 誌 変 遷 マ ッ プ		12,843		
参 照 フ ァ イ ル	LC/MARC	洋 図 書 書 誌	3,731,599	1968年1月~1991年10月
		洋 雑 誌 書 誌	512,415	1973年1月~1991年10月
		非 文 字 書 誌	150,129	1973年1月~1991年3月
		洋 書 著 者 名 典 拠	2,354,341	1977年1月~1991年10月
		洋 書 統 一 書 名 典 拠	13,376	1977年1月~1991年10月
	JP/MARC	和 図 書 書 誌	1,047,050	1969年1月~1991年10月
		和 雑 誌 書 誌	77,378	1968年8月~1990年4月
		和 書 著 者 名 典 拠	26,288	
	UK/MARC	洋 図 書 書 誌	1,195,975	1950年1月~1991年10月
	TRC/MARC	和 図 書 書 誌	253,246	1985年4月~1991年10月
GPO/MARC	洋 図 書 書 誌	281,068	1976年1月~1990年12月	

(システム業務係)

NACSIS サービス Q & A (4)

1. 学術情報ネットワークの関係

質問 1

学術情報ネットワークへ加入した場合の利点にはどのようなものがありますか？

学術情報ネットワークでは、現在、①パケット交換網、②インターネット・バックボーン（現在、試験運用中、平成4年4月より正式運用を予定）と2種類のサービス品目を提供しています。

①のパケット交換網によるネットワーク（11月末現在169機関が接続、詳細は「学術情報ネットワーク（パケット交換網）加入機関」P.30参照）の代表的なものに大学間コンピュータネットワーク、図書館ネットワークなどがあり、他にも複数の仮想ネットワークが運用されて、多くの研究分野で不可欠なコンピュータネットワークとなっています。

学術情報ネットワークへ加入するには、学術情報センターが全国の主要拠点（28ノード）に設置しているネットワーク機器と接続することが必要です。加入者側の経費負担は、設置機器等に必要加入時の初期経費とノードまでの専用線の経費のみで利用が可能となります。パケット交換網についての具体的な加入手続きの方法は、「学術情報ネットワーク加入の手引」（平成3年2月発行）を参考にしてください。

②のインターネットによるネットワークは、TCP/IP プロトコルによるLAN間通信網の提供（詳細は「インターネット・バックボーン (SINET) の運用計画について」P.24参照）を目的としたものであり、国内のバックボーンとしての役割を果たすととも米国で国際的な研究ネットワークと接続して、国際的なIP接続を実現することを予定（平成4年2月中旬試験運用開始）しています。

これらのネットワークは、学術情報センターとノード間が高速デジタル回線で接続されており、高速で高品質な通信が可能なネットワークとして、事実上日本最大の研究ネットワークとなっています。また、幹線網の使用は無料です。

質問 2

目録所在情報サービスを VTSS で利用するとき CCITT 勧告 X.25 の80年版を使用することはできますか？

CCITT 勧告 X.25 の80年版の PAD 又は同等の機能を有する機器を学術情報ネットワークに接続し、目録所在情報サービスを VTSS で利用することができます。学術情報ネットワークへの加入申請書及び VTSS 接続申請書に、80年版 X.25 を利用する旨、記入してください。

質問3

学術情報ネットワークの支線の整備計画はどのようになっていますか？

学術情報ネットワーク（パケット網）においては、学術情報センターが幹線網を整備し、各大学等をノード機関とを結ぶ、いわゆる「支線」については、大学等で整備することになっています。（国立大学については、文部省で支線の整備を進めています。）このため、学術情報センターは、大学からの接続希望には原則として対応する予定でおりますが、接続時期については調整させていただくことがあるため、新規の接続や接続条件の変更に当たっては、早めにご連絡をいただきたいと思います。

また、TCP/IP プロトコルによるインターネットの実現のため、バックボーン（SINET）の整備運用を開始しています。このバックボーンノードへの接続については、「インターネット・バックボーン（SINET）の運用計画について」P.24をご覧ください。

II. 電子メール関係

質問1

電子メールシステムに接続したとき、利用者番号を入力した後、文字化けのような文字列（図1）が表示されます。そのため、パスワードを入力するタイミングがなぐらまく接続できません。

利用者番号を入力したあとに表示される文字列は、メールシステムから送っているもので、異常ではありません。

この文字列が表示されたあと、パスワード文字列を入力してください。

USER ID - Z00690 ⇐ 利用者番号
PASSWORD--
JGQIGCAQKJBK ⇐ 文字列

図1 ログオン時の画面表示

質問2

アップロードをすると、データの一部が欠落する現象が発生します。原因と対策を教えてください。私の使っている通信ソフトは「まいとーく」です。

アップロードされたデータは、メールシステムのディスクファイルに1行単位で書き込まれます。そのため、メールシステム上で1行の書込みが終わり次の入力を受けつけられる状態の前にデータを送った場合、データの一部が消失し、欠落が発生します。

したがって、これを避けるためには、1行の書込みが完了し、メールシステムがデータ入力可能状態になってから（画面上ではシステムからプロンプトが返ってきてから）次の1行を送信すればよいわけです。

具体的には、通信ソフトの環境を変更することによって対策を講ずることができます。以下にご利用の「まいとーく」の例を示します。

- (1) 通信パラメータ設定画面を選択する。
- (2) 「ファイル送信（行）」を図2のように設定（LFコードを指定）する。

ファイル送信（行） 1:待たない 2:待時間[]秒 ~~文字列~~
 ↑
 「文字列」を選択し、[^]J を指定する

図2 「まいとーく」の場合の指定方法

この方法は、利用している通信ソフトにより多少異なっていますので、他のソフトの場合はそれぞれの通信ソフトのマニュアルをご覧ください。

質問3

USET コマンドでO/R名を登録しようとしたが、支払いコードの設定画面が現れただけで、O/R名は登録できませんでした。どうしてO/R名の登録ができなかったのでしょうか。

1. USET コマンドには、次の2つの機能があります。

① 国際電子メールを利用される利用者のO/R名の設定

この国際電子メール利用のためのO/R名の設定は、メールボックスを学術情報センターに持っている（つまり、NACSIS-MAILの利用登録を学術情報セン

ターにしている)方については、学術情報センターで自動的に行っているため、利用者が自分で行う必要はありません。

この機能は、メールボックスを学術情報センター以外のMTA（メッセージ転送エージェント）に置いている方が、学術情報センターが提供している国際電子メールサービスを利用したい時にお使いいただくものです。

- ② 国際電子メールを利用した時（送信メールのみ）に課金対象となる支払いコードの設定

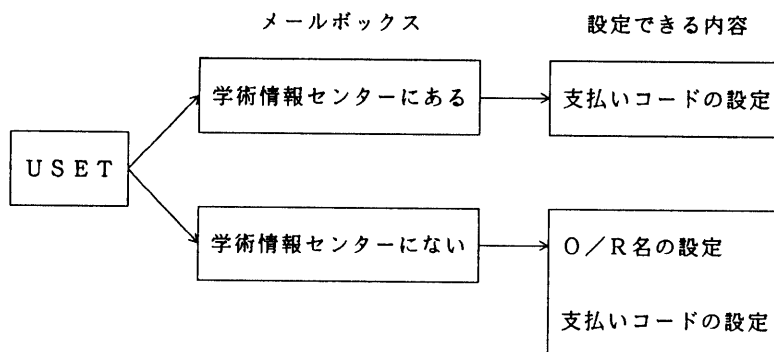


図3 USET コマンドの機能

2. O/R 名を設定する場合の処理

メールボックスを学術情報センター以外のMTAに持っている方の場合、学術情報センターにO/R名の設定が必要になります。このためには、USET コマンドを投入し、処理区分の「1：O/R名の設定」を選択することにより、O/R名の設定処理に入ります（例1）。

USET コマンドの利用方法は、「学術情報センターニュースNo.15(1991.3)」P.17「国際電子メール利用について」で説明しましたように、機能を追加したものです。

3. 支払いコードを設定する場合の処理

- (1) メールボックスを学術情報センターに持っている利用者の場合は、USET コマンドを入力すると、支払いコードの設定手順に入ります（例2）。

利用方法は、「学術情報センターニュースNo.11(1990.3)」P.16「予算項目の変更について」で説明しましたとおり、変更はありません。

- (2) メールボックスを学術情報センターには持たず、他のMTA（メッセージ転送エージェント）に持っている利用者の場合には、USET コマンドを投入し、処理区分の「2：支払コードの設定」を選択することにより、支払いコードの設定処理に移ります（例3）。

利用方法は、「学術情報センターニュースNo.15(1991.3)」P.17「国際電子メール利用について」で説明しましたように、変更されます。

例 1

(下線部が入力)

```
SYSTEM ? USET
xxx 国際電子メール利用登録プログラムスタート xxx
AMT100 R 処理区分 1 : O / R 名の変更 2 : 支払いコードの設定 ? 1
AMT101 R 処理区分 1 : 英語 O / R 名 2 : 日本語 O / R 名 ? 2
AMT102 R 組織名 (OR-ORGN-J) ? 学情大学
AMT103 R 部局名 1 (OR-UNT1-J) ? 国際学部
AMT104 R 部局名 2 (OR-UNT2-J) ? 電子学科
AMT107 R 姓 (OR-SNAM-J) ? 学情
AMT108 R 名 (OR-GNAM-J) ? 太郎
xxx 国際電子メール利用登録プログラムエンド xxx
SYSTEM ?
```

例 2

(下線部が入力)

```
SYSTEM ? USET
xxx 国際電子メール利用登録プログラムスタート xxx
AMT100 I 現在設定支払いコード (A)
AMT101 I 設定可能支払いコード (A, K)
AMT109 R 支払いコード ? A
xxx 国際電子メール利用登録プログラムエンド xxx
SYSTEM ?
```

例 3

(下線部が入力)

```
SYSTEM ? USET
xxx 国際電子メール利用登録プログラムスタート xxx
AMT100 R 処理区分 1 : O / R 名の変更 2 : 支払いコードの設定 ? 2
AMT100 I 現在設定支払いコード (A)
AMT101 I 設定可能支払いコード (A, K)
AMT109 R 支払いコード ? A
xxx 国際電子メール利用登録プログラムエンド xxx
SYSTEM ?
```

平成3年度学術情報センター・シンポジウム(東京会場)開催

平成3年度学術情報センター・シンポジウムは、去る11月14日「NACSIS事業の新たな展開へ向けて」をテーマに日本学術会議講堂において開催され、170名の参加がありました。猪瀬博学術情報センター所長の挨拶のあと下記のプログラムで講演が行われ、午後5時過ぎ終了しました。

プログラム

資源共有と ILL システム

坂 上 光 明 (学術情報センター日録情報課長)

アメリカの大学図書館間相互協力：特に ILL を中心にして

セオドア・F・ウェルチ (ノース・イリノイ大学日本研究所主任教授)

NACSIS の国際展開：現状と展望

大 野 公 男 (学術情報センター副所長)

井 上 如 (学術情報センター研究主幹)

ILL システムへの期待と要望

石 井 啓 豊 (図書館情報大学助教授)

学術情報センターに期待するもの〔パネル討論〕

宮 川 公 男 (一橋大学附属図書館長)

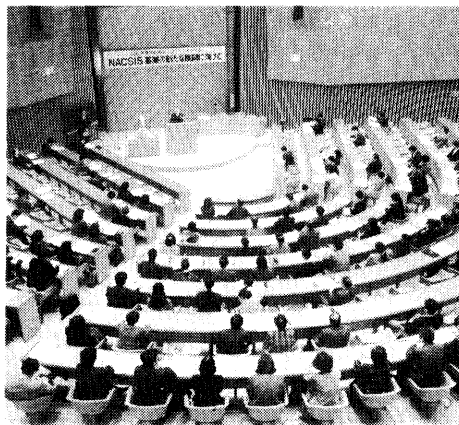
林 英 輔 (山梨大学情報処理センター長)

松 浦 正 (筑波大学図書館部長)

根 岸 正 光 (学術情報センター教授)

(コーディネータ) 井 上 如 (学術情報センター研究主幹)

なお、平成3年度学術情報センター・シンポジウム(大阪会場)は平成4年2月28日(金)建設交流館グリーンホールを会場に開催します。詳細はセンターニュース第17号をご覧ください。多数の参加をお待ちしています。



〈シンポジウム会場・日本学術会議講堂〉



〈講演するウェルチ教授〉 (研修係)

平成3年度総合目録データベース実務研修を終えて

平成3年度総合目録データベース実務研修（以下「実務研修」）は第1回が平成3年9月30日から10月25日まで、第2回が11月11日から12月6日までの各々4週間にわたり実施されました。今年度の応募数は42大学から第1回には32名、第2回には28名でしたが、各回16名の下記の方々が研修を受け全員無事修了しました。

実務研修は、各図書館における中核となる人材及び地域講習会講師の養成を目的として行われるもので、センターでも特に重要な研修の一つとして位置づけられています。今年度のカリキュラムは、センター教官による総論的講義、職員による総合目録データベースの入力基準・参照MARC・品質管理・ILLシステム等の解説、NACSIS-IR演習、図書館流通センターの見学、目録システム講習会実習が生まれ、それと並行して図書・雑誌の基準に関するレポートと講習会の指導要領作成の課題も出されました。実習においては昨年度までの講習会補助に加え、今年度は実務研修第4週目にセンター開催の目録システム講習会の講師も実際に担当していただきました。また、第2回の実務研修ではセンター・シンポジウムと日程が重なったこともあってカリキュラムに組み込まれました。

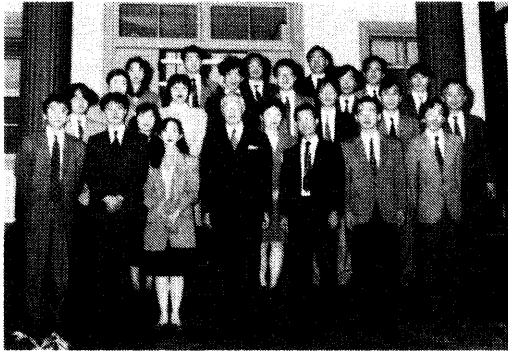
設備面では、今年度より課題作成のために各班にラップトップワープロを、研修員の運動不足解消のためにバドミントンセットを購入いたしました。

研修員の皆さんの修了後のアンケートでは、日常業務を離れ、目録やシステム、今後のセンターの在り方などをじっくり考えることができた有意義な研修であった等の感想をいただきました。また、本研修あるいはセンターへの御意見・御要望として「実務研修の目的を目録実務者研修あるいは講習会講師養成のどちらかにしぼった方がよい」「課題の配分を考慮した方がよい」「演習時間が少ない」「レポートの成果をニュースレター等で紹介し研修結果を蓄積してほしい」「センターで宿舎を用意してほしい」「研修員室が狭い」「研修員室に端末がほしい」「目録システム講習会と実務研修との中間の中級講習会を開催してほしい」等々貴重な御意見を多数いただきましたので、今後の研修事業に生かしていきたいと思っております。

研修員の皆様御苦勞さまでした。そしてこれからも御活躍ください。

第1回実務研修修了者

山口 國 雄（北海道大学）	岩 波 峰 子（富山医科薬科大学）
菅 野 博 之（東北大学）	橋 洋 平（金沢大学）
大 原 正 一（宮城教育大学）	近 藤 茂 生（立命館大学）
栃 谷 泰 文（東京学芸大学）	田 村 俊 明（大阪市立大学）
島 恵 子（東京芸術大学）	北 村 文 男（神戸大学）
大 友 悟（上智大学）	大 川 陽 子（高知医科大学）
山 本 則 枝（明治大学）	松 本 美 智 子（山口大学）
江 口 愛 子（浜松医科大学）	下 田 研 一（長崎大学）



〈所長を囲んだ第1回研修員〉



〈第1回実務研修懇親会〉

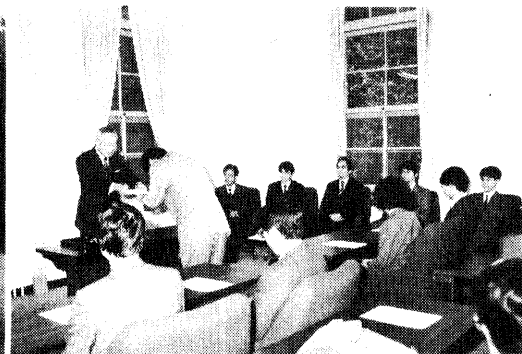
第2回実務研修修了者

田 谷 和 子 (東京大学)
大 原 寿 人 (東京工業大学)
深 沢 茉 莉 (一橋大学)
桶 本 みさよ (青山学院大学)
岩 崎 升 司 (中央大学)
高 島 学 (長岡技術科学大学)
西 野 正 敏 (福井大学)
小 川 恭 弘 (京都大学)

上 田 裕 保 (同志社大学)
岡 田 正 章 (大阪大学)
畑 野 繁 人 (広島大学)
山 崎 賢 二 (島根大学)
岡 田 惠 子 (徳島大学)
弘 瀬 高 久 (高知大学)
川内野 祐 子 (熊本大学)
能 勢 明 雄 (鹿児島大学)



〈所長を囲んだ第2回研修員〉



〈第2回実務研修修了式〉

(研修係)

「東アジア文字データの国際交換に関する 実証研究公開講演会」の開催

前号のセンターニュースでお知らせ致しました公開講演会の詳細が決まりましたので、お知らせいたします。

日時・場所 平成4年1月29日(水) 13:00 ~17:00

東京医科歯科大学 5号館講堂 (定員300名)

テ ー マ 東アジア学術情報交流の高度化に向けて

内 容 第一部 招へい講演 (対訳テキストあり)

- 中国科学技術情報研究所 (ISTIC) の現状と開発計画 (仮題)

Mr. ZHANG, Baoming (中国科学技術情報研究所)

- 中国科学院における目録データベースの構築とサービス (仮題)

Mr. JI, Zhaomin (中国科学院文献情報中心)

- China-MARC の利用 (仮題)

Mr. ZHAI, Xikui (中国国家図書館)

- 韓国の図書館政策と国立中央図書館 (仮題)

Mr. CHUNG, Hee-Chun (国立中央図書館館長)

第二部 国際共同研究総括

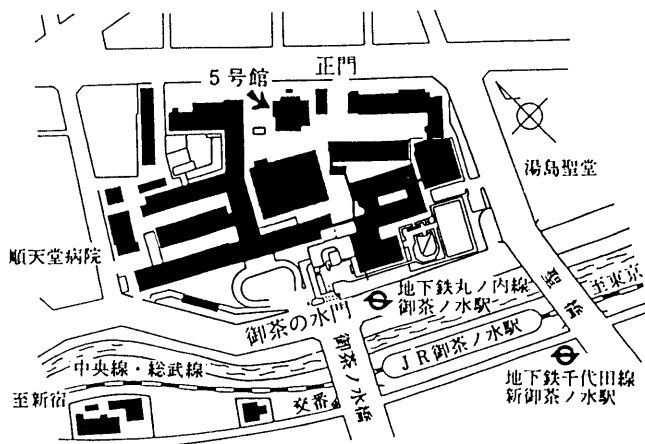
- 海外の日本情報源調査 井上 如 (学術情報センター教授)

- 文字データ交換の技術的基礎

宮澤 彰 (学術情報センター教授)

- 国際共同研究総括報告 山田 尚勇 (研究代表者・学術情報センター研究開発部長)

定員に余裕がありますので、参加希望の方は直接会場にお越しください。



(共同利用係)

人 事 異 動

発令年月日	氏 名	異 動 内 容	旧 官 職 等
		(採 用)	
3.11. 1	上野由紀子	事業部データベース課 (転 入)	
3.10. 1	田中 義國	管理部共同利用課 課長補佐	東京大学経理部経理課 出納主任
3.11. 1	小野 豊	管理部会計課経理係 (所内異動)	東京大学経理部契約課 契約第二係
3.11. 1	樋熊 直子	管理部共同利用課 情報・資料係 (転 出)	事業部データベース課 文献データベース係
3.10. 1	相川 弘二	埼玉大学附属図書館 事務長補佐 (退 職)	管理部共同利用課 課長補佐
3. 9.30	安井 規文	辞職	事業部システム管理課 ネットワーク係
3.10.31	小貫 雅彦	辞職	管理部会計課経理係

学術情報センター日誌

〔平成3年8月19日～平成3年12月9日〕

- | | |
|--|-------------------------------------|
| 8.19 国土館大学一行来訪 | 9. 5 北京大学図書館補佐 Qiang Zhu氏来訪 |
| 8.20 第1回追加NACSIS-IR講習 | 9.10 中国・西南師範大学図書館 張春氏来訪 |
| 8.21 慶應義塾大学一行来訪 | 9.13 ウェスト・インディーズ大学Kazuko Rankine氏来訪 |
| 8.28 人文系大学共同利用機関情報システム連絡会 | 9.30～10.26 第1回総合目録データベース実務研修 |
| 8.29 国大協学術情報特別委員会委員一行来訪 | 10. 1 英国図書館Terry Cannon氏来訪 |
| 9. 2～9.6 タイ王国タマサート大学図書館員 Wanna Toopibulpong氏来訪 | 10. 1～10. 2 ソウル大学図書館長Jungho Sonu氏来訪 |
| 9. 3 ジャパン・オンライン社社長Cheryl A.Hill氏他来訪 | 10. 2 東アジア文字 - 公開講演会 |
| 9. 4 韓国海事技術研究所 Hyun Yang Cho, H. Yung Kim氏来訪 | 〃 ユネスコ・アジア・大平洋地域アド |

- | | |
|--|---|
| バイザーDelia Torrijos氏来訪 | Ben Fouche氏来訪 |
| 10. 7 防衛大学校図書館一行来訪 | 10.30 駒沢大学附属図書館副館長来訪 |
| 〃 英国・コートルズ社中央研究所Paul Mason氏来訪 | 11. 1 韓国学術振興財団総務部長李茂鍵氏来訪 |
| 〃 カリフォルニア大学サンディエゴ校学長Richard Atkinson, 同副学長Donald F. Tuzin氏来訪 | 11. 3 猪瀬博所長文化勲章を受章 |
| 10. 8 韓国機械研究所李一済一行来訪 | 11.11 ~12.6 第2回総合目録データベース実務研修 |
| 10. 9 フェリス女学院大学図書館一行来訪 | 11.14 学術情報センター・シンポジウム(東京会場) |
| 10.11 韓国KINITI主催研修団一行来訪 | 11.19 国立国会図書館一行来訪 |
| 〃 米国Library of Congress, Peter D. Kwon氏来訪 | 〃 米国Japan Information Access Project Mindy L. Kotler氏来訪 |
| 10.21 ~10.24 第5回目録システム講習会 | 11.21 台湾・行政院国家科学院 許玉珠氏一行来訪 |
| 10.23 韓国梨花女子大学図書館趙明姫氏来訪 | 11.22 第2回NACSIS-IR講習 |
| 10.24 台湾・国家科学技術委員会視察団一行来訪 | 11.25 永年勤続者表彰式 |
| 10.28 英国・コートルズ社中央研究所Jerry Winter氏来訪 | 11.26 オランダ・スエッツ&ザイトリンガー社会長Adrian Swets氏一行来訪 |
| 10.30 南アフリカCSIR情報サービス部長 | 12. 9 在日大使館科学アタッシュェとの懇談会 |

海外渡航一覧

- | | | | |
|-------------|---------------|-------------|---|
| 8.25~8.31 | 計助手(米国) | 10.27~11.8 | 安達助教授(米国) |
| 9.15~9.28 | 根岸教授(ドイツ, 英) | 〃 | 橋爪助教授(〃) |
| 〃 | 小西目録情報課長補佐(〃) | 11.9~11.18 | 浅野教授(米国) |
| 9.16~9.22 | 宮澤教授(中国) | 11.24~12.22 | 内藤教授(マレーシア, インドネシア,
シンガポール, インド, タイ,
フィリピン, 香港) |
| 10.13~10.19 | 宮澤教授(韓国) | | |
| 〃 | 坂上目録情報課長(〃) | | |
| 10.14~10.20 | 浅野教授(フランス) | 11.25~12.2 | 宮澤教授(香港) |

学術情報センターニュース(第18号)

1991年12月30日発行

発行人 猪瀬 博

発行 学術情報センター 東京都文京区大塚3丁目29番地1号(〒112)

電話 (03)3942-6937(直通) 情報・資料係